



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	階級と余暇の指向性 : 近代のイギリス社会に焦点をあてて
Author(s)	平川, 知佳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(観光学)
Issue Date	2010-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43077">https://hdl.handle.net/2115/43077</a>
Type	master thesis
File Information	hirakawa.pdf



2009 年度修士論文

階級と余暇の指向性

—近代のイギリス社会に焦点をあてて—

2010 年 1 月

国際広報メディア・観光学院

観光創造専攻 修士課程 2 年

平川 知佳

## 要旨

本研究では、近年人々がどのような生き甲斐や意義を余暇に見いだすことができるのか観光学の領域で議論されていることをふまえて、余暇が確立された歴史的・社会的な背景を学問的な視点に立って改めて考察した。事例の対象としては、余暇が初めて確立されたイギリス社会に焦点をあて、余暇がどのような過程で成立されたのか検証した。またイギリスについて考察を進めるにあたり、階級に着目した。具体的にはそれぞれの階級社会によって娯楽の指向性に違いがあるのかどうか検証した。さらに論述を進める過程で、娯楽を通して階級間の関係性はどのようなものであったのか、分析を試みた。

第1章は序論とし、研究の背景、研究の目的と研究方法、研究の構成、研究の意義、先行研究の概要をそれぞれ述べた。

第2章では前近代のイギリス社会に焦点をあて研究を進めた。農村社会の労働は天候や突然の出来事によりたびたび中断されることがあったため、一時的な小休止がたびたび点在していた。また季節に応じて多種多様な祝祭が祝われていたため、労働時間と労働以外の時間 (spare time) は、現在のように時間によって明確に区別されていたわけではなかったのである。その当時の支配層は生産に従事することなく、華やかに着飾り社交や観劇、狩猟などを楽しみ時間を潰すことがステイタス・シンボルであった。一方で民衆は一時的に祝われる例祭行事や娯楽活動の時間になると、日常生活から解放され、酒に酔いしれながら歌や踊りに熱狂し村中の裕福な家々を訪ね祝儀をねだっていた。貴族はそうした民衆の非日常的な振る舞いや言動を容認し、伝統的な祝祭や娯楽活動における費用や食事を民衆のために提供していた。農村社会における伝統的な娯楽の時間は、民衆だけでなく貴族も積極的に参加することが社会的な義務として課されていた。そして最終的には娯楽を通じて共同体の安定を図っていたのである。つまりそれぞれの階級間には娯楽を通して柔軟な相互理解があったのではないかと推測した。

第3章では近代のイギリス社会に焦点をあて、近代以前の労働以外の時間がどのように変容し、余暇が確立されたのか検証した。その上で、近代に入り貴族に代わる社会の指導者として地位を高めた中流市民と労働者階級の人々に焦点を絞り、それぞれ階級ごとにどのような娯楽の指向性があったのか明らかにした。そして研究を進める過程で、近代社会に入ってから娯楽活動における階級間の関係性にはどのようなものであったのか、考察を試みた。その結果、近代に入ると資本主義経済の下、工業や産業の発展に伴い、人間はその日の作業量ではなく時間によって束縛されるようになった。それまで農民として働いていた民衆の多くが土地の囲い込みによって仕事を失ったため、都市部に移住し工場労働者として働き始めた。1847年に10時間労働法が制定されると、労働と余暇が明確に分離され、自由時間 (free time) が確立された。それまでの労働以外の時間とは異なり、個人が自由

な判断で娯楽を享受することができるようになったのである。近代以降、貴族に代わり社会的・政治的に権力をもちはじめた中流層の人々は、新たな指導者として社会改良を進めた。中流市民層は勤勉こそ美德であるという信条を近代社会にふさわしい土台として定着させようとしたのである。そのために中流層は労働者層の伝統的な祝祭や娯楽を排除し、中流的な価値に基づく合理的レクリエーションを労働者層に推奨した。合理的レクリエーションとは、労働力の再生産を高めるための休養として位置づけられていた。このような中流的な娯楽の提案が中流層の思い通りに成功することはなかった。つまり労働者の人々の娯楽の指向性が中流層と同化することはなかったのである。その後、商業的な余暇が誕生したことによって労働者層の指向に見合った娯楽が提供されると、階級によって娯楽の指向性の違いが明らかとなっていった。

第4章では第3章をふまえて、合理的レクリエーションに代わり商業的な余暇が誕生したことで階級によって余暇の指向性にどのような違いが見られたのか、分析した。事例としてはイギリス全土で発展した海浜リゾートに焦点をあてた。その結果、明らかに階級によって海浜リゾートにおける娯楽の指向性は異なっていたことがうかがえた。言い換えれば、それぞれ階級の指向性に見合う複合的な要素を海浜リゾートが潜在的に内在していたことが明らかとなった。

終章では第2章から第4章をまとめ、考察した。その結果、その時代の社会状況によって娯楽に対する位置づけや意味合いは明らかに異なっていた。前近代のイギリス社会では労働と労働以外の時間の区別はなく、娯楽を通して共同体の維持を図っていたことから、娯楽の社会的機能に価値をおいていたことがうかがえた。近代社会に入り、時間によって人々の日常生活が規律化されるようになると、労働と余暇が明確に分かれていった。個人が自由な裁量で娯楽を楽しむことができるようになった一方で、中流市民は自らの信条に基づいた真面目な娯楽活動こそ近代社会にふさわしい普遍的な余暇の過ごし方として位置づけた。つまり伝統的な娯楽に対する社会的な価値は失われ、代わりに中流的な余暇の過ごし方が社会秩序の安定を図るために重要視されるようになった。しかしこのような娯楽の統制を労働者は受け入れなかった。むしろ労働者層は合理的レクリエーションの代わりに商業的な余暇を選び、巧みに自由時間を利用して、限られた時間や空間の中で日常社会を忘れ、非日常的な娯楽を享受していたのである。すなわち労働者の娯楽に対する指向性を分析してみると、農村社会におけるカーニヴァル的な要素と通底する部分が垣間見られることから、明らかにヴィクトリア朝の社会理念と相反していることがうかがえた。また娯楽活動における階級間の関係性について分析を試みたが、近代以降の社会では空間的にも時間的にも階級の違う者同士が関わり合いをもつ機会がなくなってしまったこと、また近代に入り個人が主体となって娯楽を享受することが正当化されたため、娯楽を通しての階級間の意思の疎通が失われてしまったのではないかと分析した。

階級と余暇の指向性  
—近代のイギリス社会に焦点をあてて—

目次

第1章 序論

1-1	研究の背景	1
1-2	研究の目的と研究方法	1
1-3	研究の構成	2
1-4	研究の意義	2
1-5	先行研究の概説	2

第2章 前近代社会における娯楽の時間

2-1	はじめに	4
2-2	民衆の日常生活	4
2-2-1	伝統的な祝祭行事	4
2-2-2	民衆の娯楽活動	8
2-3	パブリック・ハウスの機能	10
2-4	一時的な日常生活からの逸脱と黙認	11
2-4-1	民衆の儀礼的制裁	11
2-4-2	シャリヴァリ	12
2-4-3	寛容な特権階級の人々	14
2-5	第2章のまとめ	15

第3章 近代化と余暇の変容

3-1	はじめに	18
3-2	近代社会における労働者の成立	18
3-2-1	過酷な長時間労働	18
3-2-2	児童労働の現場	19
3-2-3	労働の規律化と「自由時間」の成立	21
3-3	近代社会における伝統的な娯楽の衰退	22
3-3-1	囲い込みによる遊び場の減少	23
3-3-2	祝祭の衰退	24
3-3-3	ブラッド・スポーツの取り締まり	26
3-3-4	「合理的レクリエーション」の誕生	28

3-4 「中流的」な世界	31
3-4-1 中流階級の台頭	31
3-4-2 勤勉は美德である	32
3-4-3 中流層の日常生活	33
3-4-4 コーヒーハウスに集まる「市民」	34
3-4-5 レクリエーションとしての余暇活動	36
3-5 第3章のまとめ	38

#### 第4章 商業的な「余暇」の過ごし方ー海浜リゾートの繁栄ー

4-1 はじめに	40
4-2 貴族の海浜保養	40
4-2-1 スパルタ式海水治療	41
4-2-2 リゾートの発展	44
4-3 中流市民の海浜リゾート	46
4-4 労働者階級の海浜リゾート	48
4-4-1 伝統的な水浴びの習慣	48
4-4-2 大衆化への前提条件	49
4-4-3 海浜リゾートの発展ーブラックプールを事例にしてー	50
4-5 第4章のまとめ	53

終章	55
----	----

謝辞

参考文献一覧

Abstract

## 第1章 序論

### 1-1 研究の背景

現在の余暇における娯楽活動は観光やスポーツ観戦、テレビや映画を鑑賞するなど多種多様にあり、人々は思い思いに自由な時間を享受している。しかしながら一方で、新たな娯楽の過ごし方を模索することによって、人々がどのような生き甲斐や意義を余暇に見いだすことができるのか、観光学の領域で議論されている。

そもそも余暇とは、近代に入り労働が時間によって支配されるようになると、仕事の効率を高めるために労働と労働以外の時間が明確に切り離されることによって作りあげられた工業化社会の産物である。つまり近代以降に余暇が確立されることによって、現在まで個人が自ら娯楽を選び享受することができるようになったのである。

工業化以前の農村社会における農民や職人は緩慢で柔軟な時間の流れの中で日常生活を営んでいた。そうした生活の流れの中で時には天候不順や偶然の出来事、年間行事によって労働が中断されることが多かったことから、労働と労働以外の時間の区別は非常に曖昧なものであった。農民や職人は、現在のように個人が娯楽を通してどのような生き甲斐や意義を見いだすことができるのか考える余裕もなければそうした発想すら思い浮かばなかったのである。むしろ空いた時間を利用して民衆は人間関係の再確認をしたり、気晴らしを図っていたのである。つまり農村社会における娯楽活動は、村社会の維持を図るために必要な社会的機能として考えられていた。

要するに娯楽に関する意味合いや位置づけは、その時代の政治的・社会的な背景によって変容していくのである。本研究では、単なる娯楽の形態が変容していることに焦点をあてるのではなく、どのような歴史的・社会的な状況の下で娯楽が定義され、人々の指向性が確立されているのかを学問的な視点に立って考察する。

### 1-2 研究の目的と研究方法

このような観点に基づいて、本研究では近代のイギリス社会を事例として取り上げたい。その理由としては、イギリスは世界の工場として工業化を成功させた国であると同時に余暇が初めて確立された国でもあることから、イギリスの経験を参考として学ぶことは観光研究の土台として学問的な意義があると考えられるからである。

研究の方法としては、歴史学・社会学の観点から近代のイギリス社会における文化や社会状況について文献調査を進め、余暇がどのような過程を経て確立されたのかを検証する。またイギリスの場合は階級に着目し、それぞれ階級社会によって娯楽の指向性はどのような特徴が見られるのか明らかにする。さらに論述を進める過程で、娯楽を通して階級間の関係性はどのようなものであったのか、分析を試みる。

### 1-3 研究の構成

本論文の構成は次のとおりである。まず第2章では、前近代のイギリス社会に焦点をあてる。農村社会では労働以外の時間をどのような意味合いとして捉え、位置づけていたのか明らかにする。そして民衆と特権階級の人々は労働以外の時間に対してどのような指向をもっていたのか検証を進めるとともに、また娯楽の時間に対してそれぞれの階級間の関わり合いはどうだったのか考察を加える。

第3章では、近代のイギリス社会に焦点をあて考察を進める。まず近代に入り労働と余暇が明確に区別されたことによって、それ以前の娯楽の時間と比較して余暇が近代社会の中でどのように位置づけられるようになったのか考察する。また階級によって余暇の指向性はどのようなものだったのか、そして娯楽を通して階級間の関係性はいかなるものであったのか、中流市民層と労働者階級に焦点を絞り分析を試みる。

第4章では第3章の研究をふまえた上で、近代後半以降に商業的な余暇（レジャー）が確立され、発展した過程について検証する。その際、海浜リゾートを事例として取り上げ、なぜイギリスでは海浜リゾートが大規模に発展したのか、それぞれの階級の指向性に注目することによって明らかにしていきたい。

終章は第2章から第4章まで明らかになってきたことを改めてまとめる。

### 1-4 研究の意義

現在、余暇についての学問的な研究は十分ではない。本論文では、現在の余暇の基盤である近代のイギリス社会に焦点をあてる。そうした歴史的・社会的な観点から余暇を改めて捉えなおすことができれば、観光創造における研究の土台として有意義な研究となるのではないだろうか。

### 1-5 先行研究の概説

前近代のイギリス社会における娯楽について、川北稔『「非労働時間」の生活史－英国風ライフ・スタイルの誕生』（1987）、井野瀬久美恵『英国文化史入門』（1994）、ロバート・W.マーカムソン著；川島昭夫[他]訳『英国社会の民衆娯楽』（1993）などは、歴史学・社会学の観点から分析を試みている。また近藤和彦『民のモラルー近世イギリスの文化と社会』（1993）は民衆の儀礼や祝祭、娯楽の社会的な機能について、歴史学・人類学の観点から検証を試みている。

近代における余暇について、社会学や経済学の観点から考察している荒井政治『レジャーの社会経済史：イギリスの経験』（1989）や、歴史学・社会学の観点から人々の生活や娯楽の変容について検証している角山榮・川北稔・村岡健次『産業革命と民衆』（1992）などが先行研究としてあげられる。また労働者階級の娯楽活動について歴史学・社会学の観点

から分析を試みている Peter Bailey, *Leisure and Class in Victorian England : Rational Recreation and the Contest for Control, 1830-1885* (1978, Routledge) や、中流階級の生活や娯楽の指向について歴史学・社会学の観点から検証している Hartmut Berghoff, Barbara Korte and Ralf Schneider (eds) , *The Making of Modern Tourism: The Cultural History of the British Experience, 1600-2000* (2002, Palgrave) などがあげられる。

海浜リゾートについての先行研究としては、歴史学の観点から海浜リゾートの発見から発展まで検証しているアラン・コルバン著；福井和美訳『浜辺の誕生－海と人間の系譜学』（1992）、アラン・コルバン著；小倉孝誠訳『空と海』（2007）などが先行研究としてあげられる。また、近代のイギリス社会における海浜リゾートの誕生から大衆化までの過程についての先行研究としては、歴史学・社会学・経済学など様々な観点からイギリスの海浜リゾートについて分析を試みているジョン・アーリ著；加太宏邦訳『観光のまなざし』（1995）や、歴史学・社会学の観点から海浜リゾートの発展について検証を試みている John K. Walton, *The English Seaside Resort : A Social History, 1750-1914* (1983, Leicester University Press), Edmund M. Gilbert, *Brighton Old Ocean's Bauble* (1954, Methuen), J.A.R. Pimlott, *The Englishman's Holiday: A Social History* (1947, Harvester Press) などは研究を進める上で非常に参考になる。

## 第2章 前近代社会における娯楽の時間

### 2-1 はじめに

本章では、前近代のイギリス社会に焦点をあてる。当時の社会は一般的に農作業が生活の基盤となっており、教区ごとに共同体を形成して日常生活を営んでいた。こうした中で農村社会における娯楽活動はどのように位置づけられ、特権階級と民衆の娯楽に対する指向性はいかなるものだったのか考察する。さらにそうした娯楽活動を通して貴族と民衆がどのような関係性にあったのか、検証していきたい。

2-2 では民衆の日常生活を分析し、労働以外の時間がどのようなものであったか検証する。その際2-2-1 伝統的な祝祭行事、2-2-2 民衆の娯楽活動と2つの節に分けて考察する。2-3 ではパブリック・ハウスの機能について検証する。また2-4 は、一時的な日常生活からの逸脱と黙認について取り上げるが、その際2-4-1 民衆の儀礼的制裁、2-4-2 シャリヴァリ、2-4-3 寛容な特権階級の人々と3つの節に分けて考察を進める。2-5 は第2章の全体のまとめである。

### 2-2 民衆の日常生活

ここでは、前近代のイギリス社会における労働以外の時間を検証する。その際、2-2-1 伝統的な祝祭行事、2-2-2 民衆の娯楽活動について考察する。

#### 2-2-1 伝統的な祝祭行事

農業生産が中心であった当時のイギリス社会では、季節に応じてその年の収穫から翌年の収穫までの1年間のサイクルを基盤としていた。川北（1987）によると、冬と春の播種の時期、夏の草刈りや夏から秋にかけての収穫時期などは仕事量が増えるため労働時間が長かったことを示している<sup>1</sup>。このように季節の流れに応じて民衆は農作業を行っていたが、時には天候不順や突然の出来事、季節ごとの行事などによって仕事がたびたび中断されていた。このような空いた時間を利用して民衆は遊びに興じることができたのである。また当時の農村社会には多種多様な祝祭が季節ごとに催されており、比較的一定の時期にくりかえされるものが多かった。例えば、四旬節、復活祭、収穫祭、聖霊降臨祭などの祝祭やフェア（大市）などがそれにあたる。

---

<sup>1</sup> 川北（1987），p18

表 2-1 と表 2-2 ではそれぞれの地域における季節ごとにおける祝祭がどの時期に、どのくらいの回数行われていたのかを示している。表 2-1 を見ると、6 月後半から 7 月の初めにかけて 38 回の村祭りが行われており、またミカエル祭の前後には 31 回の村祭りが催されていた。

表 2-1 祝祭の季節分布（ノーサンプトンシア）

[時期]	[ウェイク*数]
1 月～3 月	0
4 月～5 月初め	1
聖霊降臨祭および三位一体の日曜日前後	4
6 月末～7 月初め	38
7 月後半	20
8 月初め	1
8 月 15 日前後	14
8 月終わりから 9 月前半	22
9 月後半	—
ミカエル祭（9 月 29 日）前後	31
10 月	18
諸聖人の祝日（11 月 1 日）前後	33
残りの 11 月と 12 月	23
合計	205

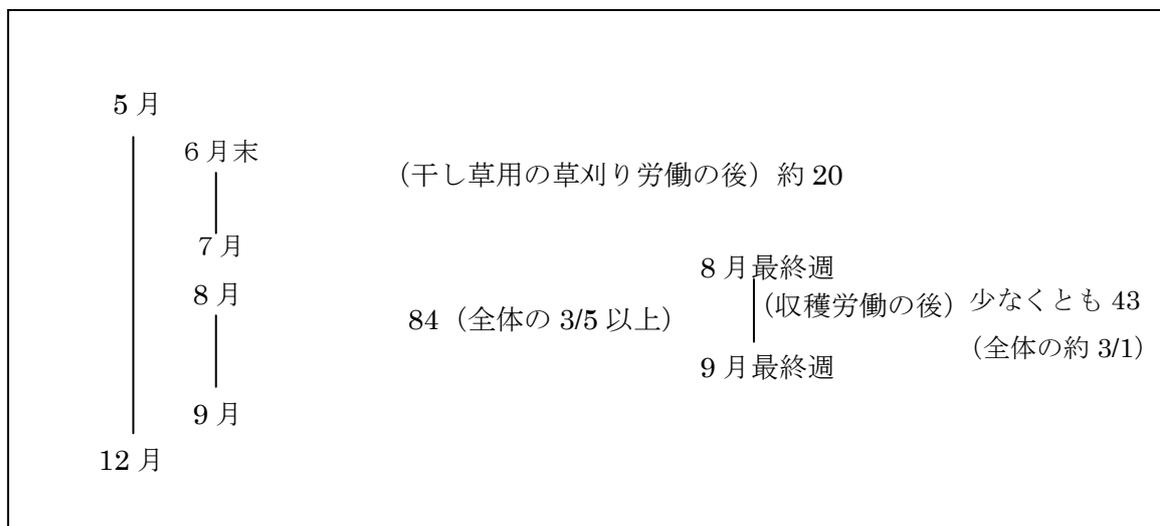
\*ウェイクとは毎年催されていた祝祭を示している。

（『英国社会の民衆娯楽』 p45<sup>2</sup>を元に筆者作成）

表 2-2 を見ると、村祭りは 6 月末から 7 月の間の干し草用の草刈り労働の後に約 20 回行われており、また、8 月から 9 月の間にかけては 84 回の村祭りが行われている。特に 8 月の最終週から 9 月の最終週は収穫労働の後に少なくとも 43 回行われていた。

<sup>2</sup> [出所]マーカムソン著；川島[他]訳（1993），p45

表 2-2 オックスフォードシアおよびその近辺の村祭りの季節分布



(『「非労働時間」の生活史—英国風ライフ・スタイルの誕生』 p18<sup>3</sup>を元に筆者作成)

この 2 つの表から分かるように、共通して 6 月から 7 月にかけて、また 8 月から 9 月にかけて過酷な労働の後に祝祭が比較的多く催されていることが理解できる。Marrus (1974) は、洗礼や結婚式、葬式や信仰確認式などのライフサイクルや巡礼、娯楽活動、儀式などを概算すると 1 年のうち 3 分の 1 は娯楽の時間として考えられるのではないだろうか<sup>4</sup>と指摘している。つまり農村社会では 1 年のサイクルの間に非常に多くの村祭りが催されており、民衆は多種多様な祝祭や娯楽活動をして楽しんでいたことがうかがえる。では具体的に祝祭はどのようなものであったか、幾つか事例をあげてみたい。

まず祝祭であるウェイクと大市であるフェアを取り上げる。ウェイクとはその教区ごとに毎年開かれていた例祭行事であり、表 2-1 にあったように、聖霊降臨祭やミカエル祭、五月祭などがそれにあたる。マーカムソン (1993) はウェイクについて、「あつあつプディングの早食い競争、馬の首輪から顔をのぞかせてする睨めっこ (いちばんおかしな顔をしたものが勝ち。) 油を塗った豚を追いかけたり (図 2-1<sup>5</sup>) (中略) ウェイクは共同体にとってのいわば小さなカーニバルだった<sup>6</sup>」と示されている。ウェイクが催されるときには、異なる教区に暮らしている親戚や親しい友人を招待することができたので、お互いの近況報告をしたり、信頼関係を改めて確認することができる時間として非常に貴重であったらしい。フェアは年に 1~2 度、イギリス全土で催されていた大市である。フェアに出かけれ

<sup>3</sup> [出所]川北 (1987), p18

<sup>4</sup> Marrus (1974), p5

<sup>5</sup> [出所]マーカムソン著; 川島[他]訳 (1993), p49

<sup>6</sup> マーカムソン著; 川島[他]訳 (1993), p48

ば、生活や商売に必要なものを簡単に購入することができただけでなく、娯楽施設も充実していたため、人形芝居や道化、手品、サーカスなど様々な催し物を楽しむことができた。

ウェイクとフェアの明確な違いについてマーカムソン（1993）は、「ウェイクはすべて基本的には祝祭の場であったが、フェアはいろいろな形態がある<sup>7</sup>。」と指摘しており、フェアは地域によって規模の大きさ、社会的な機能、娯楽施設の数などに違いが見られたようである。他にも雇い人市というものがあり、年季を終えた奉公人が次の新しい雇い主を探すために催されていた。これは雇う側にとっても労働力の確保しやすい場として適っていたようである。

図 2-1 豚つかみ競争



その他の祝祭日にはどのような民衆の娯楽活動があったのか、ガイ・フォークス<sup>8</sup>・デイと犁の月曜日を取り上げて検証する。まずガイ・フォークス・デイであるが、この祝日はどの地域でも祝われていた。民衆は鉄砲や爆竹、花火など火を利用した娯楽に興じ、集団で行進したり、飲んだり食べたりして大騒ぎをしていたようだ。マーカムソン（1993）はミドルトンでのガイ・フォークス・デイの様子について示したサミュエル・バンフォードから次の文章を引用している。

領主は若者たちに、馬 2 頭だての馬車にたっぷりといっぱいになるほどの石炭をプレゼントし、大篝火が境界近くの堤の上で焚かれた。石炭は一晩中燃えさかり、

<sup>7</sup> マーカムソン著；川島[他]訳（1993），p53

<sup>8</sup> ガイ・フォークス…1605年の国会議事堂爆破・国王暗殺計画を企てていた首謀者であったが、事件は未遂に終わった。

翌日も夜まで燃え続けていた。さらに若者たちは、パブから届いたエールを酌みかわし、飲み、食い、銃を撃ち鳴らし、そして心ゆくまで楽しんだ<sup>9</sup>。

ガイ・フォークス・デイは毎年11月5日に祝われ、行列になった民衆が裕福な家庭を訪問し、お金や小麦などの施しを受けることができたのである。犁の月曜日もガイ・フォークス・デイと同様に民衆は富裕層から施しをねだることができた。マーカムソン（1993）は犁の月曜日の習慣について以下の通り説明している。

犁の月曜日の風習としては、無言劇や儀礼的な踊りがよく行われ、農業労働者たちの行列が行われることもよくあった。そうして昼のあいだに集められたささやかな祝儀が、その夜の飲食にあてられた<sup>10</sup>。

以上のことから、例えば、草刈りの前には聖霊降臨祭が、収穫後にはミカエル祭や雇い人市が、冬の播種前にガイ・フォークス・デイなど、ある一定のサイクルで祝祭が催されていた。前近代のイギリス社会では、農作業の手順を示した農事暦と祝祭行事が記された教会暦が見事に調和されており、民衆は季節ごとの娯楽を楽しんでいたのである。川北（1987）はこのような社会状況について、「労働のあとに遊びが、遊びのあとに労働がある。というよりは、労働と遊びがたがいに準備しあうような時間の流れが、個人や家族が集団というものから切り離されることのない生活のうえにあったというべき<sup>11</sup>」と指摘している。

#### 2-2-2 民衆の娯楽活動

ではウェイクやフェアなどの祝祭行事以外の伝統的な娯楽活動はどのようなものであったのだろうか。事例としてはブラッド・スポーツを取り上げるが、その中でも熊いじめと闘鶏について検証する。ブラッド・スポーツとは、熊や牛、あなぐま、闘鶏などの動物を娯楽として利用していた遊びであった。現在では動物の命を人間の気晴らしのためにもてあそぶようなことがあれば動物虐待として非難されなくもないが、当時のイギリス社会では動物を利用した遊びがもっぱら欠かすことのできない伝統的な娯楽活動の一環であった。まず熊いじめを事例として取り上げる（図2-2参照<sup>12</sup>）。

荒井（1989）は熊いじめがどのような様子であったの以下の通り説明している。

熊はリング中央の杭に長いチェーンで繋がれており、それに5,6匹のマスティフ

<sup>9</sup> マーカムソン著；川島[他]訳（1993），p62

<sup>10</sup> マーカムソン著；川島[他]訳（1993），p66

<sup>11</sup> 川北（1987），p20

<sup>12</sup> [出所]川北（1987），p12

(番犬) が襲いかかってくる。倒されると次々に新しい犬が襲いかかり、熊が圧倒されるか、勝利をえるか、決着がつくまで続けられた。このあと鞭をもった数人の男が熊の周りを囲んで鞭を打ち、襲われると体をかわして見物人をはらはらさせる<sup>13</sup>。

図 2-2 熊いじめの様子



もうひとつの事例として闘鶏を取り上げる(図 2-3 参照<sup>14</sup>)。闘鶏は最も古いブラッド・スポーツであり、イギリスでは 12 世紀にローマ人によって伝えられたとされている<sup>15</sup>。伝統的な賭けごとの対象となっていた闘鶏について荒井(1989)は当時の様子を次のように説明している。

闘鶏は昔、ローマ人がイギリスに伝えたといわれ、四旬節に入る前の懺悔火曜日に行われる慣わしになっていた。直径 4-5 メートルほどの小さな円形の闘鶏場(cock-pit)に特別に飼育された雄鶏がスチームの蹴爪\*をつけて登場する。時には貴族やジェントリーが後援して、大邸宅の庭で開催されることもあったようで、闘鶏好きであったヘンリー 8 世は王宮の中に闘鶏場を設けていたという<sup>16</sup>。

当時の民衆はこのように熊いじめや闘鶏など手に汗握るような遊びを好み、その臨場感・高揚感を楽しんでいた。また前近代社会においてそうした伝統的な民衆の娯楽活動に

<sup>13</sup> 荒井(1989), pp6-7

<sup>14</sup> [出所]荒井(1989), p7

<sup>15</sup> 松井(2002), p109

<sup>16</sup> 荒井(1989), p7

\*スチールの蹴爪…試合前にスチール製ないしは銀製の蹴爪を軍鶏の足の後ろ側に装着させる突起上の道具である。闘鶏が攻撃や防御に利用していた。

王や貴族、ジェントルマンなどが積極的に参加し、楽しんでいただようだ。

図 2-3 当時の闘鶏の様子



### 2-3 パブリック・ハウスの機能

ここでは、娯楽活動をする上で必要不可欠な場であったパブリック・ハウスに焦点をあてる。前近代のイギリス社会における伝統的な娯楽活動の特徴としていえることは、アルコールが伴っていたことである。現在でもイギリスのパブリック・ハウス（通称パブ）は有名であるが、荒井（1989）はイギリス社会とアルコールの関係性について次のように指摘している。

イングランドでは飲酒は古くからの社会的、文化的な伝統になっていた。（中略）上流階級がクラブでアルコールを飲んだように、労働者階級もパブリック・ハウスに集まって、共に飲み、共にレクリエーションを楽しんだ。（中略）市日、フェア（定期市）、祝祭日もアルコールで盛り上がった<sup>17</sup>。

イギリスでは長きにわたり飲酒が伝統的な文化として定着していた。民衆はビールやジンを飲んでお互いの信頼関係を再確認したり、日常生活におけるストレスを発散させるためにしばしばパブに足を運んでいた。また荒木（1989）は、パブと伝統的な娯楽活動の関係性について以下の通り示している。

当時のパブは地域住民のためにさまざまな役割を演じる社交の場であり、レジャー・センターであった。また、そこは、地方政治の場であり、商談の場、賃金支払いの場、職業紹介の場でもあった。パブの経営者は客にアルコールとと

---

<sup>17</sup> 荒井（1989），p9

もに、遊びを売る数少ないレジヤ企業家でもあった<sup>18</sup>。

このように民衆の娯楽活動と飲酒が切っても切り離すことができなかった理由には、パブリカンが遊び場を提供していたからである。また仕事がない民衆は、パブに出かければ何らかの仕事をパブの経営者から斡旋してもらえたとし、取引の交渉になればパブを気軽に利用できたことから、パブリカンは民衆の日常生活にじかに接し支えていたことが垣間見られる。つまり民衆とパブリカンの信頼関係は強固なものだったに違いない。また同時に、パブは職人にとっても欠かすことのできない重要な場所であった。井野瀬（1994）は聖月曜日の習慣について、職人の間では週末からパブに出かけアルコールに溺れるため、月曜日になっても仕事をしないことは日常的で、いたって弛緩した労働慣行が広まっていたと指摘している<sup>19</sup>。以上のことから民衆にとってパブとは、人間関係を維持するための社交の場、取引の場、気晴らしの場、仕事を求める場など民衆の日常生活を支える上で重要な場所であったと理解できる。

#### 2-4 一時的な日常生活からの逸脱と黙認

次に農村社会における民衆の娯楽活動における非日常的な言動や振る舞いを取り上げ、その社会的な意味合いについて考察していく。具体的には伝統的な慣習やシャリヴァリを事例として検証する。

##### 2-4-1 民衆の儀礼的制裁

民衆の伝統的な祝祭や娯楽活動について様々な事例を取り上げてきたが、また違う側面から民衆の娯楽性について考察していきたい。それは一時的な非日常空間における放縦や破壊の要素である。マーカムソン（1993）は、バフチーン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』の中から以下の文章を引用している。

カーニヴァルは、人びとによって見物されるものではない。カーニヴァルを彼らは生きているのだ。あらゆる人がそれに参加する。カーニヴァルという概念そのものが、すべての人を包摂するからだ。カーニヴァルがつづいているあいだは、その外側に別の生活は存在しない。カーニヴァルのあいだは、生活はその法、すなわちそれ自体の自由の法にのみ服するのである<sup>20</sup>。

---

<sup>18</sup> 荒井（1989），pp9-10

<sup>19</sup> 井野瀬（1994），p154

<sup>20</sup> マーカムソン著；川島[他]訳（1993），p165

民衆は非日常的な世界の中で自己を抑制することなく、飲んだり食べたり騒いだりすることが社会的に認められていたのである。またこうしたカーニヴァル的な要素の中には、単調な日常生活、労働規律、支配階級の束縛、権威といった日常生活における「常識」に対して、儀礼的な制裁・攻撃を仕掛ける側面が内在しており、民衆は限られた時間や空間の中で気晴らしや人間関係の再確認を行えただけではなく、一時的に支配的な権力を獲得することができたのである。では次にその具体的な事例を取り上げる。

#### 2-4-2 シャリヴァリ

儀礼的な制裁の中で攻撃や挑発の要素を含んでいたものがシャリヴァリである。シャリヴァリについて近藤（1993）は、「共同体の規範・掟に違犯しているか敵対している（とされる）者にむけられた集団的制裁の示威行為で、儀礼のような様式と騒がしい音響をともなうもの<sup>21</sup>」と定義している。シャリヴァリはイギリスだけではなくヨーロッパ各地で中世から19世紀まで広く存在していた儀礼であり、地域によって様々な形態がある。

具体的にシャリヴァリの事例を2つ示したい。まず1つ目は「丸太かつぎ」である。これはじゃじゃ馬のごとく暴力的な女房と尻に敷かれる臆病な亭主という夫婦関係に対して行われる儀礼であった。近藤（1993）はジョージ・ウォーカーの『ヨークシャの風俗』から丸太かつぎについて以下の通り説明している。

夫婦の激しい喧嘩をあばき、嘲笑するためにおこなわれるが、とりわけ臆病な亭主が男まさりの女房にぶたれたような場合によくみられる。……一団の少年たちが風紀監察官のような役割をはたすべく丸太をかつぐのである。若者たちのかつぐ丸太に一人がまたいで乗り、ヤカンや鍋を棒でたたきながら、『律法』と称する科白をくりかえす<sup>22</sup>。

2つ目の事例としてスキミントンを取り上げる（図2-4参照<sup>23</sup>）。近藤（1993）はスキミントンについて次のような意味合いが込められていることを示している。

妻が『じゃじゃ馬』のように勝手気ままにふるまい、夫を支配するような家庭なぞ、忌まわしく許しがたい。文字どおりの醜聞である。柔弱な夫には女の下着と、寝とられ男にはえる角がふさわしい。（中略）引きまわし、大笑いの懲罰をくわえ、みんなでもう一度こうした共同体の規範を承認し、同調しよう、というのである<sup>24</sup>。

<sup>21</sup> 近藤（1993），p41

<sup>22</sup> 近藤（1993），p22

<sup>23</sup> 近藤（1993），pp26-27

<sup>24</sup> 近藤（1993），pp29-30

図 2-4 スキミントンの様子



こうした丸太かつぎやスキミントンが行われるのは、妻がジャジャ馬のごとく男まさりに気弱な夫に暴力をふるっている場合や、夫とは違う男と妻が密通していた場合などを第3者に目撃されてしまった際に実施され、村人が2人を公の前にひきずりだし、からかっていた。つまり家父長的な規範に反する言動や振る舞いは共同体を維持する上で断じて許されない行為であったことが暗示されている。しかしながらそうした夫婦間の問題を解決するためにシャリヴァリが行われていたという事実は表面的なことに過ぎず、儀礼的な制裁を利用して、独裁的な態度である支配者を中傷するための「権力者いじめ」の要素をはらんでいた (Ingram 1984)<sup>25</sup>。事実、シャリヴァリによって屈辱的な経験をした者の中には特権階級の人々や聖職者もいたらしく、彼らは名誉棄損を訴え、公正な法の下でシャリヴァリに参加した民衆の処分を求めている。しかしながら前近代の社会ではシャリヴァリ行為を法的に禁止するまでには至らなかったようだ。近藤 (1993) はイングラムのシャリヴァリに対する主張の中で重要な点を2つ取り上げ以下のとおり整理している。

第一は刑罰である。シャリヴァリに表現された制裁には、司法制度の欠けるところをおぎなう面もあった。司法も警察も近代的に整備されていない時代にあっては、社会規範や治安の維持は、地域の人々が自発的に監視し運営していく意志と能力にかかっていた。(以下省略)

第二は祝祭である。シャリヴァリに典型的にあらわれた所作のうちには、年中行事としての祭礼、さらにはカトリック地域における謝肉祭のレパートリと区別しにくいものもあった。「お祭り騒ぎ」の高揚した時空のただなかで、人々は社会の上下関係のきわどい逆転、聖俗の権威のパロディ、それにとまなう遊びや笑いに参加する。それによって正統とされてきた規範と、年々流動化していく生活や経

<sup>25</sup> Ingram (1984), pp96-97

済とのあいだのズレによる緊張が一時的にでも解き放たれる<sup>26</sup>。(以下省略)

シャリヴァリが行われるときは祝祭的なお祭り騒ぎという面だけではなく、共同体としての規範を犯した者を合法的に罰するときでもある。それは単なる男女間の問題を解決するわけではなくて、むしろ自分勝手に高慢な特権階級の人間に抑圧されていた民衆が、シャリヴァリを利用して支配者に攻撃的な振る舞いを示すことで、優れた統治を求めていたのである。菅原(2000)はイングラムの主張を取り上げて、「近世を通じて支配層からの抑圧はほとんど存在せず、(中略)家父長的な概念や価値観が階層を超えて共有されていたのである。したがって、それはエリートと民衆との間に相互的文化交流があった<sup>27</sup>」と説明している。つまり、シャリヴァリ行為を通して支配者と民衆との間で意思の疎通が図られ、信頼関係を再構築していたのかもしれない。また18世紀初めまでのイギリス社会ではシャリヴァリを「粗野」な振る舞いとして位置づけることは少なかったようで、むしろ民衆のシャリヴァリ行為を洗練された文学上の表現方法と結びつけている場合があった(Ingram 1984)<sup>28</sup>。つまり当時の文学者の中には、民衆のシャリヴァリ行為に対して少なからず関心を抱いていたことが明らかとなり、民衆の言動や振る舞いに対して一定の評価を示している者もいたようだ。

#### 2-4-3 寛容な特権階級の人々

ここからは民衆の破壊的で暴動化しかねない娯楽について支配階級の人々がどのような態度で受け入れていたのかを具体的に検証していきたい。

前近代のイギリス社会では、特権階級の人々が生産に従事することはなかった。貴族は毎日のように観劇や舞踏会、狩猟など娯楽に享受することに時間を費やしていたのである。川北(1987)は、貴族が社交の場で華やかに着飾り、人を見たり見られることに真の愉しみを見いだしていたことを指摘している<sup>29</sup>。そうした娯楽に明け暮れていた貴族の生活を支えていたのが民衆であったことから、娯楽活動は民衆にとって身分の高い者に対して嫌がらせができる唯一の時間だったのである。では具体的にどのようなものであったのか、マーカムソン(1993)は儀礼的な制裁を受けた支配階級の人々について当時の日刊紙から以下の文章を引用している。

彼らは出発し、さまざまな音楽を先頭にその移動をつづけた。…その音楽にあわせて、彼らはいなかじみた踊りを踊った。……しばらくは別段の異常もなかった

---

<sup>26</sup> 近藤(1993), pp48-49

<sup>27</sup> 菅原(2000), p198

<sup>28</sup> Ingram(1984), p107

<sup>29</sup> 川北(1987), pp40-44

が、途中の家を少し過ぎたあたりで、馬に乗った一人の紳士（わたしには牧師にみえた）を見かけると、連中は手をつなぎ、一列になって跳ねまわった。（中略）彼に馬を降りて彼らのニンフの一人に挨拶してくれとせがんだ。娘は、パークにいたどの少女よりもきれいで柔らかな唇をしていると彼らは口々に断言した。事態の容易ならないことを察知したその紳士は、きっと承知しなければどうなるかを怖れたのだろう。ためらわず馬から下りたのが賢明だった。そのすばやい身のこなしを見ると、彼らはいっせいに拍手喝采して紳士を放免した<sup>30</sup>。

このように民衆の娯楽の集団的・挑発的な振る舞いや言動に対して社会的地位の高い者は少なからず恐怖を感じていた。また他にも告解の火曜日にダービーで行われたフットボールの試合を観戦していた評判の悪い人物や着飾っている人物に対して粉まみれにすることが習わしとなっていたことや、前節でも事例として取り上げたガイ・フォークスの日に主教の人形が行進させられて最終的に燃やされるなど、支配階級に対する挑発的な嫌がらせは少なくなかったようである。しかしながらこのような支配階級に対しての攻撃や敵意、暴動などは一時的な娯楽活動を通して行われていたに過ぎず、共同体としての合意の上でこうした日常生活からの逸脱した行為が「正当化」されていた。つまり支配階層の人々が、非日常生活における地位の転倒、無秩序な振る舞い・言動を寛容な態度で受け入れるだけの許容範囲があったことが当時の社会における特徴である。違う見方をすれば、こうした娯楽活動が特権階級によって容認されていたからこそ、共同体としての安定した秩序が継続されていたのである。娯楽活動に内在する「非日常的」な世界を特権階級が容認し、民衆が一時的に解放されることによって、現実社会の均衡が保たれていた。そのため農村社会における娯楽活動が法によって罰せられることは目立ってなかったし、民衆の伝統的な慣習は市民権を得ていたのである。以上のことから少なくとも支配層の人々は民衆の娯楽に対する権利についてある程度理解を示していたし、積極的に後援していたことから民衆の伝統的な娯楽活動は共同体の中で尊重されていたことがうかがえる。

## 2-5 第2章のまとめ

前近代のイギリス社会に焦点をあて以下の点についてまとめる。まず民衆の日常生活の中における祝祭や娯楽活動はどのように位置づけられていたのか。そして民衆と支配層はどのような娯楽の指向性をもっていたのか検証し、さらに娯楽を通して民衆と支配層はどのような関係性を構築していたのか、明らかにする。

前近代のイギリス社会では娯楽活動が多種多様に存在していた。こうした娯楽活動は教区によって数や規模は異なっていたと思われるが、共同体の連帯感を高めるために非常に

---

<sup>30</sup> マーカムソン著；川島[他]訳（1993），p174

大きな社会的機能として位置づけられていた。民衆はそうした祝祭行事や娯楽に参加することで非日常的な祝祭において抑圧された日常生活から解放されただけではなく、人間関係の再確認を行っていた。貴族は生産活動を農民と主従の契約を結ぶことによって華やかな社交を思い思いに楽しむことで特権的な時間を過ごしていたが、同時に貴族は伝統的な民衆の祝祭や娯楽活動に積極的に参加したり支援していた。Marrus (1974) は、こうした前近代社会における娯楽の時間が共同体の内部における伝統的な慣習によって規定されていたため、個人の自由な時間とは必ずしも言えず、むしろある意味社会的責任を伴う娯楽の時間であったことに言及した上で、そうした労働以外の時間は「余暇」(leisure)と表現するよりも「共同体の安定を図る時間」(sociability)として位置づけたほうが意味合いとして適っているのではないかと指摘している<sup>31</sup>。つまり労働以外の娯楽時間は、仕事では補うことができない否定的な側面(人間関係の些細なトラブルや上下関係のストレス)などで弱体化した共同体の連帯感を健全なものへと導いてくれるものであったことがうかがえる。

ではそうした娯楽を通して民衆と支配層の関係性はどのようなものであったのだろうか。Ingram (1984) は民衆文化の歴史研究における「エリート文化」と「民衆文化」という明確な区切りと双方の文化的摩擦について強調しすぎているのではないかと指摘した上で、少なくとも祝祭的な娯楽活動やシャリヴァリを通して相互の「文化交流」があったのではないかと分析している<sup>32</sup>。マーカムソン (1993) も同様に民衆と特権階級の間に関わり合いについて考察しており、それによると特権階級の人々は、クリケットやボクシング、闘鶏などの費用を民衆のために負担していただけではなく、民衆の娯楽活動に積極的に参加していたことを指摘していた<sup>33</sup>。いままでの事例を通して考えてみても、必ずしも階級間の「交流」がなかったとは断言できないだろう。少なくとも、伝統的な娯楽活動を通して民衆の言動や振る舞いが「正当化」されている背景には、特権階級の人々が共同体を維持する上での社会的責任や主従関係の契約に伴う奉仕の義務から伝統的な娯楽活動を尊重していただけではなく、共同体という閉鎖社会の中で空間的・時間的に民衆と関わり合いをもつ機会があったことから少なからずお互いに「共通」の娯楽の指向性があったのではないだろうか。マーカムソン (1993) は、特権階級の人々は思考や行動の様式が農村社会の経験に

深く根ざしている側面があったことに言及し、上流の経験と民衆の経験が重なり合う点が存在していたことを指摘している<sup>34</sup>。民衆と特権階級の間に娯楽を通してどのようなコミュ

---

<sup>31</sup> Marrus (1974), pp4-6

<sup>32</sup> Ingram (1984), pp79-80

<sup>33</sup> マーカムソン著；川島[他]訳 (1993), p127

<sup>34</sup> マーカムソン著；川島[他]訳 (1993), p150

ニケーションが成立していたのか、今後慎重に考察していかなければならない。しかしながらここでは、支配層が娯楽活動における社会的な機能に対してある一定の評価を示していたことがうかがえたため、伝統的な娯楽活動に対して民衆と特権階級は、双方柔軟な歩み寄りを図っていたのではないかと考える。そうした社会状況だったからこそ、前近代のイギリス社会はメリー・イングランド（愉快で陽気なイギリス）と称されていたのではないだろうか。

## 第3章 近代化と余暇の変容

### 3-1 はじめに

前章では前近代のイギリス社会に焦点をあてて考察した。その結果、農村社会には多種多様な例祭行事や娯楽活動があり、民衆だけではなく支配階級も積極的に参加・支援していた。伝統的な娯楽の時間になると人々は日常生活における「正当性」を否定し、非日常的な世界の中で娯楽に興じた。貴族は民衆の娯楽活動を積極的に擁護し、食事や酒、費用を賄い、民衆は盛大に騒ぎ盛り上がった。人々はこうしたカーニヴァル的な時間の中で現実社会の緊張感から一時的に解放され気晴らしを得ていただけではなく、特権階級との柔軟な意思の疎通を図り、お互いの関係性を再確認していたのである。つまり娯楽の時間は共同体を維持する上で重要な社会的機能として位置づけられていたことが理解できた。

本章では前章をふまえて、近代以降のイギリス社会に焦点をあて、どのような過程を経て余暇が確立されたのか分析するとともに、階級社会における余暇の指向性について考察をする。その際、労働者階級と中流階級に軸をおいて明らかにしていく。さらに近代社会においてそれぞれ階級間の関係性は娯楽を通してどのように変容したのか、考察を試みる。

まず労働者階級に焦点をあて、3-2 近代社会における労働者の成立、3-2-1 過酷な長時間労働、3-2-2 児童労働の現場、3-2-3 労働の規律化と「自由時間」の成立と順に考察する。次に3-3 近代社会における伝統的な娯楽の衰退に焦点をあて、3-3-1 囲い込みによる遊び場の減少、3-3-2 祝祭の衰退、3-3-3 ブラッド・スポーツの取り締まり、3-3-4 「合理的レクリエーション」の誕生という順にそって検証を進める。

2 つ目に中流市民に焦点をあて、3-4 「中流的」な世界、3-4-1 中流階級の台頭、3-4-2 勤勉は美徳である、3-4-3 中流層の日常生活、3-4-4 コーヒーハウスに集まる「市民」、3-4-5 レクリエーションとしての余暇活動、という順番で検証をする。3-5 は第3章のまとめである。

### 3-2 近代社会における労働者の成立

ここでは、近代社会における労働の環境がどのように変容したのか具体的に考察する。その際、3-2-1 過酷な長時間労働、3-2-2 児童労働の現場、3-2-3 労働の規律化と「自由時間」の成立、という順番で検証を進める。

#### 3-2-1 過酷な長時間労働

近代に入り民衆の日常生活はどのように変容したのだろうか。まずは労働の環境がどのように変化したのかを改めて考察したい。18世紀の末頃から19世紀にかけてイギリスでは本格的に産業革命が勃興し、それまでの時代の流れとは明らかに異なる社会体制を構築させようとしていた。それは季節の流れに応じて農作業を行っていた時代から、労働が時間によって規律化され、効率性を重視した工業化の時代へと大転換したのである。農業革命

による土地の囲い込み（エンクロージャー）や大規模な工場経営の展開がイギリス各地で拡大し始め、市場原理に基づき資本主義的な農場経営を始めた地主は農業労働者として民衆を雇用したが、それ以外の民衆は都市部に仕事を求めて工場労働者になったのである。国をあげて急速な工業化を推進した近代初期のイギリス社会では、公的に労働者の「余暇時間」の重要性について議論する者はいなかった。むしろ労働時間を長くし、いかに生産力を高めていくかが焦点であった。そのため都市部の工場経営者は、労働者に対して長時間労働を課し、労働時間や労働規則の遵守を厳しく指導した。井野瀬（1994）は当時の状況について、近代から労働時間を長くさせようとする圧力が高まり、12、13時間労働を強いられたことが当たり前であったことを指摘している<sup>35</sup>。こうした遊ぶ時間もない工場での仕事は労働者にとって極めて恐ろしく耐えられないものに映っていたことを次のように指摘している。

家内労働や小作業場での労働に慣れてきた労働者によって、機械の動きにあわせて規律正しい労働を要求する工場は耐えがたいものであった。自由な人間にとってたんなる一本の手として工場に入っていくことは奴隷の状態になるに等しいものであって、もっとも飢えた人びとをのぞいてはそれをさける傾向をもっていたのは当然のことである<sup>36</sup>。

初期の工場は孤立した遠隔地に建設されており、工場の周辺に住宅や教会、学校、売店などが立ち並び1つの村が生まれた。労働者たちはこうした村を工場村と呼び、牢獄のような場所と位置づけていた。そのため初期の工場経営者は、何とか労働力を確保しようと必死になっていた。やっとの思いでかき集められた労働者層は、失業した農業労働者や除隊兵士、破産した職人、浮浪者などが多く、その上労働意欲に欠けており、工場の規律に違反するどころか、かつての農村社会における伝統的な習慣をもちこんでくる者が多かったようだ<sup>37</sup>。

### 3-2-2 児童労働の現場

こうした状況の中で安価な労働力で、比較的従順に労働時間や工場の規律を守ることが出来るのはどのような労働者であるのか、工場経営者は思い悩んだ末に女性や子供の雇用を進めた。しかし初めの頃は職を失った貧民や浮浪者などの子供たちが工場労働をせざるをえなかった状況を除いて、工場労働に嫌悪感を抱いていた労働者層は子供を工場労働の現場で働かせることに対して強く反発していたようだ。以下の引用は当時の紡績工場に子

<sup>35</sup> 井野瀬（1994），p155

<sup>36</sup> 荒井・内田・鳥羽（1981），p137

<sup>37</sup> 荒井・内田・鳥羽（1981），p138

供を労働力として提供した親が世間から笑い者にされている様子を示した一文である。

紡績工場にとって児童労働は極めて好都合なものであった。(中略)たとえば、切れた糸を結びなおす作業に従事した「糸つなぎ工」のように、ある種の作業では児童の小さな身体や指先が機械の補助作業として絶好であった。(中略)しかしながら、最初、工場の周辺に住む人びとは工場労働を軽視し、自分の子弟が工場に勤めることを強硬に拒否したのである。「長い間労働者は自分の子どもを工場に入れることは、父親として恥であると考えていた。その恥をあえて甘受したものは町中の笑い者になった」のである。また「あの娘は工場の女工であった」という理由で破談にされたケースがあったほどである<sup>38</sup>。

このような社会状況から初めのうちは主にロンドンや南部で失業していた不熟練労働者の教区徒弟と呼ばれていた子供たちが大量に工場へ送り込まれ、大人と同じように長時間労働を課せられていた。当時子供の労働時間は昼夜交代制の24時間労働で、労働時間が18時間にも及んでいた工場もあったようだ<sup>39</sup>。こうした状況の中で比較的人道的な工場主であったロバート・ピール卿は、「徒弟の健康と徳性に関する法令<sup>40</sup>」を議会に提出し、1802年に成立させた。これが最初の工場法ともいべきもので、徒弟に対する1日12時間以上の労働の禁止や最低水準の教育・衛生についての規定、また監督者の設置を工場経営者に義務付けた。しかしながら実際の監督は極めて甘いものであり効果があるものとは到底いえなかったようである。

次第に工場建設が都市部に集中すると、工場経営者は都市に住む子供を労働力として確保することができるようになったため、工場労働に対する人びとの嫌悪感が次第に薄れ、受け入れるようになった。農村社会では家族労働が一般的であり、子供は父親や母親の仕事をそばで手伝いながら仕事を覚えていったが、工場での労働現場では工場主の管理の下で子供たちはそれぞれの持ち場に分かれて仕事に従事するようになった。村岡・川北(1986)はこのような労働の環境が変容したことによって、子供養育の基盤を弱める結果になったことを指摘している<sup>41</sup>。つまり労働の現場と家庭が分離したことによって、家族単位の経営基盤が失われただけではなく、子供たちは工場経営者の管理の下で近代社会の規律的な習慣を指導されるようになったのである。その後、19世紀初頭に人道主義者や社会改良家が女性や子供の過酷な労働環境に関して社会に訴えかけたことにより1833年には工場法が改正され、9歳未満の児童の雇用を禁止すること、厳格な工場監督が義務付けられた。さらに労働者による労働時間短縮運動が1830年代から1850年代まで起こり、1847年に10時間労働法が成立したことによって、少しずつ子供たちの労働環境が改善されていった。そう

<sup>38</sup> 荒井・内田・鳥羽(1981), p141

<sup>39</sup> 荒井・内田・鳥羽(1981), pp142-143

<sup>40</sup> 荒井・内田・鳥羽(1981), p145

<sup>41</sup> 村岡・川北(1986), p165

した労働の改善を図った要因の1つとして、長時間労働を強いられていた子供たちが過労によって集中力を失い、手や足を誤って機械に挟み切断してしまう事故が相次いでいたからである。また遅刻や居眠りに対しては、罰金や解雇のおどし、体罰など様々な方法をとって工場規律を守らせていた。表3-1では当時の工場委員報告のデータから子供への懲罰方法を示している。このように社会改良家や人道支援家たちは子供たちがおかれている厳しい労働条件を大きな社会問題として取り上げたのである。

表3-1 工場の規律を守らせる方法

解雇	3 5 3
解雇のおどし	4 8
罰金	1 0 1
体罰	5 5
親への申し立て	1 3
工場に監禁する	2
降格	3
合計	5 7 5

(『産業革命を生きた人びと』 p154<sup>42</sup>を元に筆者作成)

### 3-2-3 労働の規律化と「自由時間」の成立

近代化に伴い仕事を求めて都市部に生活の拠点を移した労働者の多くが、当初から都会の生活に慣れていただけではなかった。工場経営が不景気ときには野外で何か仕事を探す者もいれば、干し草づくりや収穫の時期が近づくと農村に戻るような半農半工の者もいた<sup>43</sup>。近代初期の労働者層にとって田舎の農村社会はまさにユートピアであり、都市部で生活していてもいずれ故郷に帰ることを労働者は夢見ていたのである。それまでの農村社会における季節の流れに応じた時間の感覚が残っていた労働者にとって、近代社会の確立に伴う長時間の労働は耐え難いものだったことがうかがえる。労働者は長時間労働に束縛される生活よりもむしろ少ない賃金で短い時間働くほうがよっぽどましだと思っていた。また家族経済が基盤であった農村社会の習慣から、家族全体の労働によって得られた収入が日常生活を営む上で十分であれば仕事を辞めてしまう者もいた。このように農村社会の弛緩した労働習慣、伝統的な家族経済の基盤などが根強く残っていたのである。しかしながら産業の発展、機械の改良化によってますます効率性や注意力が求められるようになった。そうした状況についていけなくなった労働者の中には機械の打ちこわしを行う者がしばし

<sup>42</sup> 荒井・内田・鳥羽 (1981), p154

<sup>43</sup> de Grazia(1974), p76

ば現れ、時には大きな暴動が引き起こされていた。不安定な工場経営に頭を悩ましていた工場経営者も少なくなかったようで、工場経営者の多くが継続的な工場生産を維持するために、「余暇」の制度化に取り組み始めた。19世紀中頃に入り10時間労働法が制定されると、労働者は過酷な長時間労働から解放されることとなった。ある工場における聞き取り調査では、約70%の労働者が10時間労働に賛成しており<sup>44</sup>、労働時間と余暇時間を明確に意識し始めることとなった。つまり労働以外の時間（spare time）ではなく、労働と明確に区切られた自由時間（free time）が成立したのである。西川（2009）はde Graziaの見解から以下の文章を取り上げている。

靴屋は好きな時に好きな時に働き始めた。何か面白そうなことが起これば、作業の手を休めて見に出かけた。（中略）靴屋には作ったり修理したりすべき靴があった。飲み屋でカードをしているときは靴をつくっていなかったが、いずれにせよ彼は「自由な時間」を過ごしてはいなかった。近代的な意味での時間に従って生きてはいなかった。彼には作るべき靴があり、飲むべきビールがあり、遊ぶべきカードがあったが、そのどれをも彼は「労働と余暇」という言葉を必要とせず行っていた。それに対して、工場で10時間労働に従事する労働者が手にしたのが「自由時間」、すなわち、以前は手にしたことがなかった「無為の集中」であった。労働時間と自由時間はこうして分けられ、それが現代まで続くことになった<sup>45</sup>。

ここでの労働以外の時間（spare time）はあくまで産業革命以前の時間の感覚である。つまり民衆が労働の合間を縫ってパブで一息入れることや、気の知れた仲間同士が遊びの中で意思の疎通を図ることなど、地域社会の連帯感を補うために必要な束の間である。しかしながら自由時間（free time）は完全に個人に与えられた時間であった。つまり地域社会の義務的な要素を伴わず、限られた時間の中で個人が望むものを取捨選択しながら過ごす時間である。ここでの自由時間とは時は金なりというように言わば有効的、効率的に時間を過ごすことが暗示されているのである。

### 3-3 近代社会における伝統的な娯楽の衰退

近代初期では、労働者をいかに近代的な労働規則に適応させることができるのかが焦点であった。つまり伝統的な生活習慣をどう変革するかに懸かっていた。こうした状況の中で、伝統的な娯楽の時間は一体どのようなものとして社会の中で位置づけられ、変容していったのか検証していく。その際、3-3-1 囲い込みによる遊び場の減少、3-3-2 祝祭の

---

<sup>44</sup> de Grazia(1974), p72

<sup>45</sup> 西川（2009）, pp2-3

衰退、3-3-3 ブラッド・スポーツの取り締まり、3-3-4「合理的レクリエーション」の誕生 という順に沿って考察する。

### 3-3-1 囲い込みによる遊び場の減少

前近代における野外での娯楽活動は、長い間主に開放耕地や共同地を利用することが慣習となっていた。しかしながら、近代に入り土地の囲い込み（エンクロージャー）が始まり、私有地への自由な出入りが禁止されるようになった。労働者が当たり前のように娯楽活動で利用していた遊び場が急速に減少していったのである。1760年代から1815年までに土地の囲い込みを行った件数は2000件程に達しており<sup>46</sup>、民衆の娯楽であったフットボールや輪投げ、クリケットなどの娯楽活動が制限された。荒井（1989）は、当時の状況についてあるジャーナリストの文章を引用している。

村民の共有権は無視され、芝生の広場に対する村民の権利は奪われた。そこは彼らの祖先の楽しい遊び場であった。また村の少年少女も父祖伝来の芝生地を奪われた。そこは子供らの両親や祖父母がかつて陽気に騒ぎ回ったところであった<sup>47</sup>。

またマーカムソン（1993）はノッティンガム郊外におけるバスフォードの当時の様子を次のように示している。

村のなかにも周囲にも、娯楽のために開放された土地がない。この欠如は、ひどく不満の原因になっている。（中略）ここで嘆かれている遊び場の欠如は、教区の若者たちと土地の所有者、占有者とのあいだに口論やいさかいをおびたたくひき起こしてもいる。若者たちがクリケットなどの試合をする目的で、土地に侵入することが日常茶飯事だからである<sup>48</sup>。

労働者は新たな娯楽利用のための土地を探そうとしても様々な商業的な施設の建設計画や大規模な農場計画などによって阻まれた。そうした中、地主の中には完全に私有地化した土地で野兎やキジなどを狩猟し、独占的に楽しんでいる者もいた。また一方では、それまでの伝統的な民衆の娯楽活動に対して温情的な態度を示した土地所有者が、誰でも自由に娯楽活動を楽しむことが出来るように配慮し、わざわざある一定の土地を民衆に提供していたケースもあった。しかしながら大概、野外での娯楽活動は法的な権利として認められていたのではなく、あくまで古くから土地所有者と民衆の間の「慣習」として存在して

<sup>46</sup> 荒井（1989），p20

<sup>47</sup> 荒井（1989），p20

<sup>48</sup> マーカムソン（1993），pp228-229

いたことから、土地所有者は囲い込みを行った土地で娯楽活動をしていた者に対して強硬に法的手段をとって処罰していた。次の引用は、無断で囲い込みに侵入し遊びをおこなっていたエセックス州スティーブル・バムステッドの民衆（被告）が裁判所で自らの主張を訴えた時のものである。

当該教区には古くから、あるすばらしい風習があつて、ならわしとなり認められてもきました。……住民はみな、当該の囲い地の中、その土地の上で、……1年のあらゆる適当な時期に、自らの自由な意思で望むままに、すべての合法的な競技、スポーツ、遊びを行う自由と特権とを行使するならわしでありました。権利のうえからもこれまでそうでありましたし、いまもそうあるべきなのです<sup>49</sup>。

こうした土地の囲い込みに対する訴訟はイギリス各地で起こっていたが、伝統的な慣習に対する権利が法的に認められることは少なかったようである。また、働く合間を縫って法廷に娯楽活動の権利を主張するだけの余裕がある民衆はめったにいなかったことから、特権階級の人びとが圧倒的に優勢であったことがうかがえる。こうした伝統的な民衆の慣習が衰退した背景についてマーカムソン（1993）は、農村社会ではいわゆる慣習によって特権階級に義務や責任を与えて自由な利益追求を制限していたのだが、近代化になると、個人を尊重する社会が重視され、貴族にとって慣習的な権利がたんなる重荷としてみなされるようになったことを指摘している<sup>50</sup>。近代化に伴う農村社会の衰退によって、民衆は次第に都市における工場や企業との関係性を構築し始めた。そのため、慣習的な娯楽活動を捨てるを得なくなってきたのである。また土地の囲い込みによって、農業や産業拡大を図る特権階級の人びとは、市場原理に基づき私利私欲を追求するあまり、民衆に対する社会的な義務やお互いの意思の疎通に関して面倒なものを感じるようになった。これはつまり特権階級の人々と民衆との関係性が崩壊し、共同体の連帯感が次第に失われていったことを意味している。

### 3-3-2 祝祭の衰退

ではこうした農村社会における野外の娯楽活動が制限された中で、ウェイクやフェアなどの祝祭はどのような影響を受けたのだろうか。伝統的な祭礼に対する不満は農村社会からあったが、近代に入ると批判的な声が強調されるようになった。こうした否定的な態度を示していたのがピューリタンであった。もともとピューリタンは中世から民衆の伝統的な娯楽に対して快楽的な時間の浪費と非難し、真面目に生活を営むよう主張していたがあ

<sup>49</sup> マーカムソン（1993）， p233

<sup>50</sup> マーカムソン（1993）， pp240-241

まり効果がなかった。しかしながら近代に入り労働者の伝統的な生活習慣に悩まされていた工場経営者や企業家などの意見とピューリタンの思想が一致したことで社会改良として全面的に伝統文化を排除し始めた。彼らは各地で伝統的な祝祭の取り消し、禁止などの法令をだし、「真面目」に労働に励み、休日には静かに時間を過ごすことを労働者に促した。例えばグロスターシャではウェイクを早くから禁止するようその教区の牧師や住民が裁判所に訴えていた。

(省略) 不法なウェイクやレヴェルあるいはその他の無秩序な人の集まりが開かれ、しかもその週の数日間つづけられます。これらはたいへんな数の群衆を集め、不道徳と不敬とを禁じた女王陛下の布告をないがしろにし、主日をけがすことはなはだしいものがあります。そこでは、騒動と銘酩、淫らさといかがわしき、その他の不道徳が実践されるのです<sup>51</sup>。

近代に入ってからこうした祝祭における民衆の振る舞いが「野蛮」であると位置づけられるようになり、ピューリタンが中心となって真面目な生活習慣を近代社会の中に定着させようとしていた。もはや近代社会において伝統的な祝祭行事は民衆を「怠惰」に導くものとして非難の対象となっていたのである。

またハーフォードシャのソーブリッジワースで毎年行われていたフェアの社会的な役割が衰退してきたことについて以下のような引用がある。

(省略) このようなフェアを開催することは商業上の理由なるものから、また住民の利益にとっても好都合であるとして正当化されたことがないとはいえません。しかしいまや、古き秩序はまったく過去のものとなっています。この種のフェアの最後のなごり——家畜の販売——も急速に失われようとしています<sup>52</sup>。

確かに農村社会における伝統的な祝祭では、商業的に必要な物や農業に必要な物などを購入できる場として重要な役割を果たしていたが、近代に入り労働者階級が次第に都市部に生活の拠点を移動したため、祝祭の規模は小さくなり機能も限られたものになっていった。しかしながら伝統的なフェアやウェイクなどの祭礼は労働者にとって一時的な非日常を味わうことができた重要な時間だったことに変わりなかった。18世紀の前半までは特権階級の人々も積極的にフェアやウェイクといった祝祭に参加していたが、19世紀前半にはピューリタンの意見に賛同した権力者の支援もあり、次々とイギリス各地で祝祭が廃止さ

<sup>51</sup> マーカムソン (1993), p297

<sup>52</sup> マーカムソン (1993), pp302-303

れたのであった。井野瀬（1994）は、地域差はあったものの産業革命以降、伝統的な祝祭日は近代に入り急速に減少していったことを指摘しており、中央銀行であったイングランド銀行では19世紀初めに47日間の休業日を設けていたが、1834年にはクリスマス、グッド・フライデー、メイ・デイ、11月1日などわずか4日間しか休みを設けなくなったことを示している<sup>53</sup>。また荒井（1989）は、産業革命以前は広い意味で休日が多かったのに対し、19世紀初期の繊維工場では、日曜日以外の年間の休日がわずか5日ないし12日に減少したことを指摘している<sup>54</sup>。以上のことから、「合理的」な近代社会の統制によって、労働者の伝統的な例祭行事は縮小・衰退していったのである。

### 3-3-3 ブラッド・スポーツの取り締まり

近代以前までの農村社会では祝祭や娯楽活動が多様多岐にわたっていたが、近代以降、前節でも指摘したように、土地の囲い込みや祝祭の取り締まりなどによって伝統的な民衆の娯楽活動は減少していった。労働者に求められたことは、真面目な生活習慣を身につけることであつた。しかしながら必ずしもそうした社会風潮の中で、労働者が言われるがままに労働に精を出すようになったとは言えなかつた。労働者が求めていたことは、伝統的な慣習の存続であつた。荒井（1989）は伝統的な月曜日の習慣について次の通り示している。

編物工、絹靴下工は彼らの製品が高値のときは、月曜、火曜はめったに就業しようと思わず、大部分の時間を居酒屋か九柱戯[ボーリングに似たゲーム]の遊びに費やしている。織布工は通常、月曜日は酔っ払っており、火曜日は頭痛、そして水曜日には道具が故障している<sup>55</sup>。

労働者の多くは不規則な時間に工場に出向いたり、必要に迫られたときに死に物狂いで働くことが当たり前であつたことから、現在のように月曜日から金曜日まで始業時間や規則を守り、しっかり働くということは到底ありえなかつた。伝統的な娯楽活動の一つであるブラッド・スポーツは囲い込みによって野外で行うことができなかつたため、パブリカン（居酒屋の店主）が労働者のためにブラッド・スポーツを組織することで、労働者は農村社会と変わらない娯楽に耽ることができたのである。しかしながら次第に例祭行事と同様に労働者のブラッド・スポーツに対しても批判が相次いだ。その中心にいたのが1824年に設立された動物虐待防止協会（The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals＝略してRSPCA）<sup>56</sup>の人々であつた。動物を虐待することは「非人道的」であり

<sup>53</sup> 井野瀬（1994），p155

<sup>54</sup> 荒井（1989），p13

<sup>55</sup> 荒井（1989），p16

<sup>56</sup> 松井（2002），p118

取り締まりを強化しなくてはならないと主張し始めたのである。こうした動物虐待に反対した人びとの多くは社会改良家として活躍していた中流市民層が中心であった。彼らにとってパブを中心として盛んに行われていた熊いじめや闘鶏などの乱痴気騒ぎは近代の社会において「危険」な民衆娯楽として位置づけていた。動物虐待に対する反対運動は以前からしばしば起こってはいたが 1802 年の動物愛護の法案は否決されていた。しかしながら、1835 年には牛掛け、熊掛け、闘犬、闘鶏などを行うための場所を提供した者には 5 ポンド以下の罰金が科せられる動物虐待防止法が成立した<sup>57</sup>。またさらに 1849 年には動物虐待防止法は改正され、ブラッド・スポーツに対してさらに厳しい罰則が科せられることとなった。

しかしながら、地域によって聖職者や市長が積極的にブラッド・スポーツに関与していたところもあり、ある地域の治安判事は 1840 年に動物虐待防止協会に対して以下のような文章を送っていた。

かの制定法は、彼ら[RSPCA のメンバーたち]が密告者ないしはスパイとして、わが地方をわたり歩く権限を認めてはいない<sup>58</sup>。

動物虐待防止協会の会員は積極的に地方に出向き、ブラッド・スポーツを行っていないかを確認し、見つけた場合には密告できるようになっていた。取り締まりの強化によってブラッド・スポーツを失った地域もあれば、一方で伝統的な娯楽活動を擁護する地域もあった。またパブの主人がブラッド・スポーツを都会の裏側で密かに組織していたことから、取り締まりは容易なものでなかったのである。しかしながらブラッド・スポーツに対する批判が強調されることによって民衆の娯楽に対して懐疑的な立場を示した者たちが増えていった。例えばマーカムソン（1993）は、1833 年にバーミンガムの学校長が出した小冊子の中から以下の文章を引用している。

スタフォードシアはながらく牛掛けによって悪名を馳せてきました。ティプトンと周辺の数多くの炭坑は、子供の頃から牛掛けをこのんで行うようにしこまれ、（成人に達しても）なりだけは人間で、あとは何一つ人間らしいところのない輩を何千人とうみ出してきたのです。彼らは極端に無知で、野卑で、性根が悪く、そしてこの血なまぐさく野蛮な娯楽へのこの者たちの熱狂は、とめどがなく手のほどこしようがありません。（中略）人間のかたちをした悪魔から、苦しむ哀れな牛を救おうとする師の努力が功を奏し、1827 年という年は、この血なまぐさいス

---

<sup>57</sup> 松井（2002），p118

<sup>58</sup> 松井（2002），pp120-121

ポーツが完全に消滅した記念すべきかがやかしい年となったのです<sup>59</sup>。

驚くことにここでは労働者を人間のかたちをした悪魔という表現で非難している。つまり動物を虐待して喜んでいる労働者たちは「暴力性」を有しているため、「無知」な存在として位置づけられていた。1830年代には、動物虐待防止協会の他に、動物への合理的人道主義促進協会（1830年から1833年）、動物の友協会（1832年から1852年ごろ）、動物への虐待を抑止するための女性協会（1830年代）など次々と協会が設立され、新聞や雑誌などのメディアを利用して動物愛護を強調する記事を掲載した。また日曜日のお祈りの時間に「野蛮」な娯楽活動の自粛を説くなど各地域で労働者の伝統的な娯楽活動に対して徹底的に攻撃を始めた。バーミンガム・ブラック・カントリー地域では牛掛けに反対するキャンペーンが30年間にもわたって続けられ、さらに1835年に成立した動物虐待防止法案による強硬な法的措置の介入によって牛掛けはまったく行われなくなっていったのである。

このような中流市民を中心として取り締まりを行った社会的背景について西川（2009）はそれまで同じ屋根の下で住んでいた商人や労働者、職人などが次第にお互いの暮らしぶりを目撃しなくなると、実際には見たこともないブラッド・スポーツに対して「非道徳的」と主張し始め何が何でも統制しなくてはならないという議論が生まれたことに言及し、1790年代以降から政治や社会に対する考え方に違いが生じ始め、居住空間が区別されるようになると中流市民と労働者の間で明らかに物理的な距離の広がったことを指摘している<sup>60</sup>。1840年代までにはブラッド・スポーツの多くが消滅したが、万が一存続していたとしても近代的な改良により「上品」なものへと変容していったのである。

#### 3-3-4 「合理的レクリエーション」の誕生

近代に入ってから伝統的な例祭や娯楽活動に対する取り締まりの強化、法的な措置によって、労働者の娯楽は少なくなった。伝統的な娯楽が攻撃されることによって、労働者が唯一過酷な日常生活から解放された時間は、パブでアルコールを飲んでいるときだけだったといっても過言ではない。イギリス政府は労働者のアルコール中毒者が増加していた状況を考慮し、蒸留酒の飲酒から引き離すために1830年にビール法を制定し、ビール販売を自由化した。それによってアルコール依存に歯止めをかけることができると期待していたが、1821年から1830年の蒸留酒の消費量が約5798万ガロンだったのに対して、1831年から1840年の蒸留酒の消費量が約7680万ガロンと消費量はさらに30%以上も増加したことから法案はまったく効果がなかったといえる<sup>61</sup>。またアルコール依存症の他に、その当時過酷な労働により自殺者がゆるやかに増加していた。こうした状況の中で禁酒運動家や社会改良家がアルコールに代わる健康的な娯楽活動を推進することに着目し、「健全」な娯

<sup>59</sup> マーカムソン（1993），p246

<sup>60</sup> 西川（2009），pp8-9

<sup>61</sup> 荒井（1989），p26

楽の提供によって労働者の生活態度を改めようと試みた。これが「合理的レクリエーション」であった<sup>62</sup>。工業都市であったリースでは、合理的娯楽協会が土曜日の夜に演奏会を開き、聖月曜日の習慣に代わる「洗練」された週末を過ごすよう労働者を促していた。また、労働者向けに家庭音楽やティー・パーティーを提案したり、図書館や博物館、動物園などに労働者を誘い出すことで休日の改善に努めた。他にも文化会館を新しいレクリエーション施設として改修し、経営者と雇用者が共に楽しみを共有できるような試みがあったこと<sup>63</sup>、さらに禁酒運動家による健全なレクリエーションの提供がなされた。トマス・クック（1808－1892）も禁酒運動に賛同し、鉄道を利用して労働者のエクスカージョンを提供した第一人者であった。クックはミッドランド鉄道会社と連携し、レスターからラフバラまで屋根なしの客車を 20 台から 25 台提供してもらい、1 シリングの往復割引運賃で 570 名の労働者を送った<sup>64</sup>。これは現在の団体旅行やパック旅行の原型としてクックが成し遂げた画期的な出来事として有名である。クックはその後初めて旅行代理店を設立させ、安価で多様な旅行パックを次々と開発していった。また 1851 年のロンドン博覧会の際には、マンチェスター＝ロンドン間の料金を大幅に引き下げ、往復 5 シリングで労働者の団体旅行客を送り込み大成功を収めたことから、近代社会におけるクックの功績は大きかったことがうかがえる。このように社会改良家は 1840 年代以降から様々な角度から合理的レクリエーションを提案し、労働者の道徳的な意識向上のために努力していた。しかしながらこうした健全な娯楽活動が実を結んだケースは少なく、あまり効果がみられなかったことを荒井（1989）は以下のとおり示している。

こうした「合理的レクリエーション」の運動は大衆にあまりアピールしなかったようで、大衆をアルコールから引き離すという点でも目立った成果は見られなかった。改革者たちの意図が、社会改革にあったにせよ、産業の能率向上にあったにせよ、大衆のレジャーを道徳的にコントロールすることは容易なことではなかった<sup>65</sup>。

合理的レクリエーションが民衆の伝統的な娯楽活動に取って代わることがなかったのはなぜか。それは合理的レクリエーションの基盤に「勤勉」という中流的な理念が付随していたからである。労働者の望んだ娯楽活動は必ずしも「上品」な娯楽ではなく、非日常を

---

<sup>62</sup> 川島（1983）は、近代に入ると酒場に耽る労働者階級の人々は道徳的な「半病人」として位置づけられており、「健全」な娯楽を中流市民が提案することによって「半病人」であった労働者を伝統的な娯楽から切り離そうと試みている。この政策はカウンターアトラクション（counter-attraction）と呼ばれた。

川島（1983），p 300

<sup>63</sup> Bailey（1978），p36

<sup>64</sup> 松村・川本・長島・村岡（1996），p113

<sup>65</sup> 荒井（1989），p33

享受することができる娯楽であった。荒井（1989）によると、その後労働者の労働環境の改善や休日の増加、所得向上によって時間やお金に余裕が出来ることでそれをビジネスチャンスとして捉えた企業家が、労働者の指向に見合った商業的な娯楽の提供を始めたことを指摘した上で、このことがかえって民衆の生活環境の改善や道徳的な向上に一役買ったのではないかと主張している<sup>66</sup>。以上のことから、工場主や社会改良家、禁酒運動家など中流市民層が中心となって進められた合理的レクリエーションは、労働者を一方的に抑えつけるだけに過ぎなかった。

---

<sup>66</sup> 荒井（1989），p33

### 3-4 「中流的」な世界

ここでは近代に入り台頭した中流市民層に焦点をあて、余暇がどのような位置づけであったのか分析をする。その際、3-4-1 中流階級の台頭、3-4-2 勤勉は美徳である、3-4-3 中流層の日常生活、3-4-4 コーヒーハウスに集まる「市民」、3-4-5 レクリエーションとしての余暇活動、という順に検証を進める。

#### 3-4-1 中流階級の台頭

近代に入りイギリス社会全体が、市場原理に基づく経済発展を進めた。そうした社会体制の変容に伴って一躍地位や権力、富を拡大させていったのが中流階級の人々である。それまで貴族が農村社会の中で支配的な立場にいたが、近代以降は貴族に代わり中流階級の人々が近代社会の担い手となっていった。18世紀に入ると消費革命もしくは生活革命が起こり、輸入品の価格が下がるとそれまで特権階級に限られていた購入層の幅が広がっていき、投資や貿易などによって財を得た中流層の暮らしはますます豊かなものへと変容していった。様々な目新しい商品や嗜好品などがイギリス市場に出回り始めていた様子について道重（1999）は以下のとおり指摘している。

基本的な食料品でいえば従来一般的であった主食の黒パンが白パンへと変化し、ワインやエールなどしか存在しなかった飲料に茶が登場し、その消費が拡大するにしたがって砂糖の消費も増大した。（中略）一般の食器類でも、ピューター製に代わる陶磁器製の食器、木製に代わる金属製のナイフやフォークなどがあられ、衣料品では捺染された綿布やモスリンといった新しい素材が使用されるようになった。またクッション付きの椅子、絨毯、絵画、新しいかたちの家具などもこの時期に登場してくるようになった<sup>67</sup>。

中流層でも様々な職業の人々がいたため、所得格差がありどのような暮らしぶりであったのか想像するのはなかなか難しい。主に工場経営者や資本家、貿易商人、金融業者、牧師や公務員などが一般的な中流層のイメージであるが、典型的な中流層を想定するためには、一つの目安として家庭の中で使用人を雇うことができるだけの所得があるかどうかであると長島（1987）は示している<sup>68</sup>。また道重（1999）は、中流市民層がどのような職業の人々であったのかを考察する上でダニエル・デフォーを手掛かりとしており、それによると、土地もしくは投資収入によって生活することができる階層は特権階級（貴族）であ

---

<sup>67</sup> 道重（1999），p84

<sup>68</sup> 長島（1987），p145

り、資本の利益や他人を雇用することによって収入を得ていた階層を中流階級と分けて考えられていたようだ<sup>69</sup>。さらに道重（1999）はランドフォードの主張の中で次の 2 つの点について注目している。まず 1 つ目は、職業によって階級を捉えることは地域格差を考慮すると見極めることは難しいため、むしろ家族の出自や財産、社会的な繋がり、上品さ、育った過程など多岐に渡る情報によって中流階級を捉えるべきであること、また 2 つ目は、救貧税を 40～50 ポンド支払っている人びとを中流層の下限とすることを指摘している<sup>70</sup>。こうしたことから近代社会において中流階級の人々は資本主義経済の下で利益を追求するだけではなく、文化的な資質などが求められていたのではないかと考える。つまり中流階級の人々は他の階級社会とは異なる意識を常にもって生活していたことがうかがえる。では中流階級の人びとは他の階層とはあえて一線を画し、どのような共通の価値意識をもつようになったのか、次の節で具体的に考察していきたいと思う。

#### 3-4-2 勤勉は美德である

近代に入り中流層は自ら得た富を土台として、上流階級の人びとの消費行動を模倣することで上流社会の一員に入りこもうと努力する者がいた。地代収入によって優雅で気ままな生活を送っていた貴族は、1年の大半をカントリー・ハウスで過ごし、狩猟や乗馬を楽しみ、当時の社交場であったバースへ足を運んではオペラや舞踏会に出かけ華やかさをお互いに誇示することに時間を費やしていた。上流気取りをした人々は、カントリー・サイドの土地を購入し、屋敷を建てて貴族と積極的に関わりを持とうとした。また社交シーズンにバースへ出かけ自らの資本力を駆使して何とか貴族の仲間入りを果たそうとする野心家もいた。こうした上流気取りの中流階級に対して冷やかな態度を示していた貴族もいたが、一方では、由緒ある家柄の貴族と巨万の富を誇示する中流層との間で縁組みが行われるケースもあった。中流階級の人々がこのように地位や権力を獲得することができるようになった背景には、プロテスタントの教えがある。新井（2001）はリチャード・D・オルティックの『ヴィクトリア朝の人々と思想』の中から中流層の信仰の中心であるプロテスタントの教えに関して次の文章を引用している。

プロテスタント的敬虔主義である福音主義は教義や礼拝形式よりも、人間がどのように生きるべきかという問題にかかわっており、人生それ自体をどう生きるかというよりも、死後の世界への準備期間としての人生の生き方に関わっていた<sup>71</sup>。

---

<sup>69</sup> 道重（1999），pp79-80

<sup>70</sup> 道重（1999），p80

<sup>71</sup> 新井（2001），p34

プロテスタントの教義には、人間は日常生活において勤勉や節制の精神が常に求められており、そうした中で富を築いていくことは死後の世界の永遠の富を築くことに結びついているのだと説かれているのである。勤労や節制の精神を説くプロテスタントの教えは資本主義の競争社会の中で資本力を高めた中流層から強い支持を得ていたのである。社会的な地位や権力を獲得した中流階級の人々の中には、次第に日々真面目に日常生活を過ごすことこそ近代社会にふさわしいと考えるようになり、自らがお手本となって社会改革を進めていかなければならないという自覚が芽生え始めた。サミュエル・スマイルズ（1812－1904）の有名な書物である『自助論（セルフ・ヘルプ）』（1859）にもあるように、自ら運命を切り開いていく者にこそ成功の道が開けるのだとする社会的風潮が広がっていったのである。ではそうしたプロテスタントの教えを信仰していた中流層の人々はどのような休日を過ごしていたのだろうか。リーダー（1983）は近代初期の中流階級の人びとが日曜日をどのように過ごしていたか、次の通り示している。

多くの中産階級の家庭では、特にヴィクトリア朝初めの頃は、トランプ遊びや演劇は、日曜日はもちろんのこと平日にも禁止されていた。これは17世紀の清教徒との伝統を忠実に受け継いだものであった<sup>72</sup>。

近代初期はこのように真面目な態度で余暇を過ごすことが彼らの美德として定着しており、娯楽を享受する場合はある程度節度のあるものを選んでいた。中流層の人々はこうした真面目な余暇の過ごし方が近代社会に定着すれば、秩序が安定し調和のとれたものへと導いてくれると信じていた。

### 3-4-3 中流層の日常生活

自らが社会のお手本となることを信条としていた中流層の人びとにとって、家庭とはリスペクタブルな生活を誇示することができるもっとも大切な場所であった。中流階級の家庭では、メイドを雇い家事・洗濯など身のまわりの世話をしてもらっただけではなく、子供の教育に熱心であったため家庭教師を雇うこともあった。中流層の女性は、家庭の中で静かに節度をもって過ごすことが求められていた。そうした礼儀正しく振る舞う中流層の女性たちは当時の社会における理想的な女性像であった。村岡・川北（1986）は当時の女性について、「中流階級の女性たちの

図 3-1 中流的な女性像



<sup>72</sup> リーダー（1983）， pp182-183

義務は、家庭を、働く夫たちが帰宅して精神を充足しうるやすらぎの場にする、着飾って客を優雅にもてなすこととされる<sup>73</sup>。」と指摘している。

伝統的な職住一致の生活が近代に入り衰退し、家庭と仕事場が明確に分離されていくと、中流層の家庭では、夫は外で働き、妻は家で夫の帰りを待つ専業主婦が定着してきた。女性が積極的に外で働くことは当時の中流階級の家庭では考えられないことであり、万が一女性が外に出て何かをする場合には、なにがしかの社会的な奉仕活動や博愛主義の運動に関わっている場合に過ぎなかった。男性が仕事から帰ってくるまで女性は、裁縫や刺繍、読書やピアノなど家庭の中でできるたしなみをしていた。そうした女性のために子供の教育や使用人の使い方を分かりやすく説明する雑誌が次々と刊行されることによって、家庭の中の女性像はますます形づくられていった(図3-1参照<sup>74</sup>)。来客があっても女性は隠すことなく客間のソファで細工物を手にした状態で迎えることによって、リスペクタブルな家庭であることを誇示していたことを川北(1987)は示している<sup>75</sup>。

近代以降、商工業の発展に伴い都市部における住宅の過密化、生活環境の悪化が引き起こされていた。そのため財を成した中流階級の人々は閑静な住宅が立ち並ぶハンズタウン、カムデンタウン、ケンジントンなど郊外へ移り住むようになっていたのである。郊外に建てられた中流階級の邸宅では中流的な生活を普段から実践していた。例えば、華やかではないが清潔な衣服を身につけていることであったり、窓辺に花々を飾ったり、友人を食事に招いたり、もしくは中流的な趣味に合ったプリント模様の壁紙や絵画を選ぶなど、中流層は理想的な家庭をつくりあげていったのである。もちろん地域差や収入に応じて中流階級でも違いが見られたはずであるが、少なくとも中流層の人々は社会進出を図ると同時に、こうした理想的な家庭、中流的な生活の確立などに重点をおいて、中流的な日常生活を過ごしていたのである。

#### 3-4-4 コーヒーハウスに集まる「市民」

16世紀後半から17世紀にかけてイスラム教圏からコーヒーがヨーロッパ各地に広まり、諸説あるが、1650年にイギリスのオクスフォードで初めてコーヒーハウスが開かれた。それまでもっぱらパブが情報交換や商談の場として利用されていたが、昼間に仲間と気軽に歓談したい者や、真剣に商談がしたい者、また何かの問題に対して議論をしたい者などにとってコーヒーハウスは非常に便利な場所であった。またコーヒーは二日酔いや他の様々な病気に効果があるとされたことから多くの人々がコーヒーハウスに通うようになったのである。初期のコーヒーハウスは身分や職業、上下関係など特に区別することなくどん

---

<sup>73</sup> 村岡・川北(1986), p181

<sup>74</sup> [出所]川北(1987), p95

<sup>75</sup> 川北(1987), p101

人間でも出入りすることが可能であったようだが、実際コーヒーハウスはある程度限られた人間が集まる場所として広まり、特に中流階級の人々がコーヒーハウスを好んで足しげく通っていた。ではなぜ限られた人々だけがコーヒーハウスに通っていたのか。それはコーヒーハウスが単なる喫茶店ではなく、政治的にも社会的にも機能する公共的なコミュニケーションの場を確立していったからである。ハーバーマス（1973）は、1670年代にすでにイギリス政府が喫茶店を中心として議論の場をもつことに危機感を抱いていたらしく、集会を開くことを禁止するお触れを出していたことを指摘している<sup>76</sup>。政治的な圧力がありながらも、中流階級を中心として集まっていたコーヒーハウスはにぎわいを見せ、中流層は様々な情報交換を行いながら次第に幅広い知識を身につけていった。中流階級の人々は社会や政治の問題について自ら関心をもって積極的に討論に参加するようになり、イギリス社会の「一市民」としての権利を自覚し始める。その「市民」とはどのような人々であるのか、ハーバーマス（1973）によると、ある程度の社会的なステイタス、つまり財産や教養をもちえていなければ一市民として認められていなかったようだ<sup>77</sup>。

着実にそうした公共的な論議の場が形成され、コーヒーハウスが経済、社会、文化、芸術など様々な情報の拠点として確立されると、ジャーナリズム文化が花開いていった。1640年代には新聞が数多く発行され、国内のニュースや市場の状況、政治問題などの記事が掲載されていた。新聞記者はコーヒーハウスにたびたび出かけては最新の情報を手に入れることができた。当時は王党派や議会派の政権争いをめぐる問題が新聞に取り上げられることが多かったため、コーヒーハウスは王室及び議会からたびたび厳しい制約を課されたにも関わらず、多くの中流市民層がコーヒーハウスに出入りし、国内だけではなく海外にも関心を広げて新聞を読み議論を交わしていた。当時の様子を角山・川北・村岡（1992）は以下のとおり指摘している。

コーヒーハウスがイギリス人の生活文化にもたらした諸影響の中でもとくに重要なのは、それが出版文化とのあいだにもった密接な関係である。コーヒーハウスを支えた疑似ジェントルマン・中産市民層の勃興は、すなわち文字を読める階層の拡大を意味したし、もっと直接的にいても、日刊新聞などの芽がふいたのはまさにタバコとコーヒーの香りのまっただなかにおいてであったのだ。コーヒーハウスの顧客たちの、海運ニュース、内外の政治情報への渴望が、より純粹に知的な関心とあいまって、日刊紙をふくむ定期刊行物の成長を不可避にした<sup>78</sup>。

---

<sup>76</sup> ハーバーマス（1973），p88

<sup>77</sup> ハーバーマス（1973），p118

<sup>78</sup> 角山・川北・村岡（1992），p113

1702年に『デイリー・カラント』や『ポスト・ボーイ』、1770年には『モーニング・クロニクル』、1780年は『ヘラルド』が発行され、近代社会の市民層は、コーヒーハウスに出かけてはそれらの新聞の中から自分の好みの新聞を選択していた。こうしたイギリスの市民について川北（1987）は、当時の市民層はニュース狂（ニューズ・モンガー）であったことを指摘しており<sup>79</sup>、それだけ社会や政治、経済などに対して敏感に反応していたことがうかがえる。実際様々な種類の新聞がこの頃から発行され、1776年頃にはロンドンだけで53もの定期刊行物が刊行されていたことを角山・川北・村岡（1992）は示している<sup>80</sup>。また新聞と同様に雑誌の発行も相次いだ。デフォーによる『レビュー』やアディソンやステイヤーによる『スペクテイター』、スウィフトらによる『タトララー』などが主に刊行され、中流的な娯楽や社会教育についての記事が多く市民層の関心を高めていった。『スペクテイター』は毎日3000部発行され、また『ジェントルマンズ・マガジン』は10,000部以上が発行されていた<sup>81</sup>。18世紀中頃にはデフォーの『ロビンソン・クルーソー』やスウィフトによる『ガリバー旅行記』などの小説が次々に発行されることによって読書の習慣が徐々に定着していったのである。

コーヒーハウスを中心として様々な情報や文化が形成され、多方面にわたり関心を抱いた者たちがそれぞれ興味のあることについて交流を深める中で、次第にクラブが形成されるようになった。クラブとは様々な共通の目的・目標などを有した者達が団体となって定期的にコーヒーハウスに集まり、お互いの意見を聞いて理解を深めることができた場である。こうしてコーヒーハウスを中核として中流市民の人々は、様々な社会的、政治的、文化的な情報に対してそれぞれ独自の視点で積極的に議論し交流を深めることができたのである。またこうした様々な情報が集まる文芸的な公共圏が確立されたことで、中流市民の人びとは風俗、道徳、思想、政治、社会などの情報などを得ることができただけでなく、そうした情報を得ることによって直接顔を合わせなくてもメディアを通して相互理解を深めることができ、さらに共通の認識を構築することができたのである。つまり中流階級の人々は、日常生活における「普遍的」な社会常識をつくりあげていったのである。

### 3-4-5 レクリエーションとしての余暇活動

18世紀まで中流階級の人々は、真面目な娯楽としてコーヒーハウスでの議論や読書、クラブ活動などを楽しんでいた。19世紀中頃から19世紀後半に入りますます中流市民層の富や権力が大きくなると勤勉で節度のある生活習慣はやや緩んできてはいたが、それでもなお市民として独自の価値観の中で余暇を過ごすことが基盤にあった。そうした中で中流層

---

<sup>79</sup> 川北（1987），p47

<sup>80</sup> 角山・川北・村岡（1992），p114

<sup>81</sup> Plumb（1974），p20

は、明日の労働のために必要な活力を再生産する時間＝レクリエーションとして余暇を確立していったのである。それは知的でありながら心身の回復にかなうことを意識したものであり、例えば公園での散歩、ピクニック、改良されたスポーツ、自然旅行などがあげられる。では具体的に中流的な余暇はどのような位置づけであるのか、幾つか余暇活動を取り上げ、考察していきたい。

まずスポーツを取り上げる。1860年代以降になってからチームワークが求められるスポーツは道徳的な向上に結びつくものとして教育現場で受け入れられるようになっていった。例えば中流層の子弟が通っていたパブリック・スクールでは道徳的な向上を高めることや心身の修練としてスポーツを教育の一環として重要視し始めた。それまで伝統的な民衆の娯楽活動であったフットボールやクリケットなどは荒々しい残酷な遊びとして位置づけられていたにも関わらず、19世紀に入ってから改良され、ルールを規定すると「合理的」なスポーツとして位置づけられるようになった。フットボールは各パブリック・スクールによって始まった時期は異なっているが、初期の段階では下級生が上級生にいやいやながら駆り出されおり、試合を行っている最中に上級生から殴る蹴るなどの暴力をふるわれていた。明らかにいじめをする手段としてフットボールが用いられ問題視されていたが、19世紀前半から中頃にかけてルールが一般化することによってそうしたいじめも緩和されていた。リーダー（1983）は中流階級の人々にとって「男らしさ」を形成する上で重要であったことを以下のとおり指摘している。

一方、スポーツが「男らしさ」を育てたのも事実であった。これは中産階級が重んじていた徳だった。その上、スポーツは当然競争であり、この競争の精神こそは中産階級の活発な生活を作り上げた大きな原動力であった<sup>82</sup>。

中流階級にとって競争の精神を養うことは、資本主義社会の中で打ち勝っていける人格を形成させるうえでも重要な役割を果たしていたのかもしれない。

では次に自然旅行を取り上げてみる。19世紀の中頃から後半にかけてイギリスではロマン主義的な自然観が中流市民層に広まり、自然の中を散策することによって心身の回復につながると位置づけられた。それまでは、古典主義の影響を受けたグランド・ツアーやピクチャレスク・ツアーなどが主流であり、イギリスとは異なるヨーロッパの牧歌的な農村風景を賛美していた。イギリス各地に旅行に出かける際は絵画的な自然を楽しむためにクロード・グラスを利用して自然を創りあげていたのである。しかしながらそうした自然観が19世紀初頭にかけてコウルリッジ（1772－1834）やワーズワース（1770－1850）などのロマン派詩人が台頭すると変容していく。古典主義的な自然観ではなく、あくまでイギ

---

<sup>82</sup> リーダー（1983）、p196

リス国内における荒々しい自然そのものを見つめなおし、荒々しさの中に「崇高」なものを見だし評価したのである。中流市民層の人々は、たびたび自然旅行に出かけては人の手が触れられていない「壮大」な自然を鑑賞するだけではなく、「本物」の自然にふれることで自らと向き合い、精神的な豊かさを回復することができると考えた。旅行先としてはイギリス北部に位置する湖水地方やスコットランドの高地などが主な対象地として選ばれ、ツアーガイドやガイドブック、博物館などを提供することによって限られた階級の人々の神聖な旅行先となっていた。

静かな時間の中で心身の健康の回復を図ることは中流市民の真面目な精神に適っていた。中流階級の中には上流階級のような華やかな社交の世界を真似る者もいたが、あくまで中流的な価値に基づいて余暇を過ごすことが中流市民として理想とされていたことがうかがえる。自然の中で精神的な安らぎを得ることができた中流市民層は、その後自然環境を開発する動きに対して非常に敏感になっていった。湖水地方における鉄道敷設という問題が起こった際には、中流市民を中心とした人びとがナショナル・トラストという自然保護の団体を世界で初めて立ち上げ鉄道開発に反発し、湖水地方の自然破壊をある程度食い止めることに成功している。そうした中流層の自然保護の姿勢は一定の評価に値する。しかしながら視点を変えてみると、中流市民の人々は自然旅行が大衆化してしまうかもしれないという危機感を抱いていたことがうかがえる。またそうした自然保護の活動は、中流層が資本主義の下で着実に貿易や投資、工場拡大を行って近代化を推し進めていた姿勢とは対照的である。こうしたことから、近代の発展を担ってきた中流階級の人々にとって物質的な豊かさを手に入れながらも、自ら築いた近代化を否定し自然回帰を求めた部分に矛盾が生じているのではないだろうか。

### 3-5 第3章のまとめ

近代社会に入り資本主義経済の競争社会の中で、労働と余暇が時間によって明確に分かれ、自由時間が確立された。農村社会における労働以外の時間と異なり、自由時間はあくまで個人が娯楽活動を選択し自由に享受することができるようになったため、そこには社会的義務は伴わなくなった。貴族に代わり中流市民が近代社会の指導者としての地位を確固たるものにすると、彼らは政治的・社会的なリーダーシップを発揮しただけではなく、道徳的にも力を注いでいった。自らの信条を「普遍的」な理念として位置づけた上で、中流市民層の人々は中流的な指向に見合った近代社会の改良を図った。その社会改良の対象となったのが伝統的なメリーイングランドの生活習慣である。中流層を中心とした社会改革家は、伝統的なウェイクやフェア、ブラッド・スポーツ、聖月曜日の習慣などを次々と攻撃した。近代社会において伝統的な娯楽は「野蛮」な文化として駆逐されていったのである。こうして農村社会のようなメリーイングランドの面影はなくなっていき、代わりに近代社会における自由時間 (free time) の中で、中流的なレクリエーションが推奨され「正

当化」されたのである。

しかしながら労働者階級は言われるがままに合理的レクリエーションを受け入れたわけではなかった。近代後半に入り商業的な余暇（レジャー）が誕生し、労働者の指向に見合うように娯楽施設が建設されたことによって、労働者は合理的レクリエーションよりも商業的な娯楽を選択したのである。つまり中流市民の指向性と労働者の指向性を比較してみると必ずしも一致していない部分がうかがえた。次の第4章では海浜リゾートを事例として取り上げることによって、それぞれ階級ごとにどのような娯楽の指向性がみられるのか、具体的に明らかにしていく。

では近代以降、娯楽を通して階級間のコミュニケーションはどのように変容したのだろうか。農村社会と比較してみると、近代以降のイギリス社会では娯楽を通しての階級間のコミュニケーションは少なくなっていたと推測する。その理由としてまず、身分の違う者同士が直接関わり合いをもつことが少なくなったことが1つの要因としてあげられる。川北（1987）は人口史の研究者である P・ラスレットを参考にして次のとおり指摘している。

（工業化以前の）イギリス社会は基本的に「使用人を含む家族」を基礎としており、働く民衆の労働の場というよりも、ほとんどが「家族」のなかにあった。工場と事務所を主体とする工業化以後の社会との決定的な違いがそこにある<sup>83</sup>。

つまり近代以降は同じ階級の者同士が顔を合わせることはあっても、違う階級の人々と接する機会は少なくなったのである。市場原理に基づく近代化の発展に伴い経済格差が拡大し、階級によって住む地域が明確に区別されることになったことで、空間的・時間的にも違う階級の者同士が直接顔を合わせる機会を失った。

また農村社会の時代の特権階級の人々とは異なり、「集団的」「カーニヴァル的」な祝祭や娯楽活動に対して敵意をあからさまに示していた中流市民の人々は、自らの信条に基づいた娯楽活動こそ近代社会にふさわしい余暇の過ごし方であると位置づけていた。そのため個人が主体となり娯楽を享受すること、それこそが近代社会の中で「正当化」されたのである。つまり近代社会に入ってから個人が尊重されるようになったことで、農村社会における娯楽の社会的機能は失われ、娯楽を通じて階級間の意思の疎通を図ることはなくなってしまったのではないだろうか。この点については今後さらに様々な角度から研究を進め、慎重に考察していたかなければならないが、現時点では明らかに農村社会と比較すると、近代以降のイギリス社会では階級ごとの差別意識が高まり、娯楽を通しての階級間のコミュニケーションは少なくなったのではないかと考える。

---

<sup>83</sup> 川北（1987），p51

## 第4章 商業的な「余暇」の過ごし方ー海浜リゾートの繁栄ー

### 4-1 はじめに

近代のイギリス社会では、中流層が中心となり健全なレクリエーションによって労働者を啓蒙することで近代社会にふさわしい人格を形成するよう期待していた。しかしながらこうした合理的レクリエーションは労働者階級に受け入れられることはなく、かえって中流層と労働者階級の階級間には差別意識が生まれたのではないだろうか。そうした社会状況の中、娯楽をビジネスチャンスと捉えた資本家が商業的な娯楽活動を次々に生みだしていった。これがいわゆる商業的な「余暇」の始まりであり、例えば、ミュージック・ホールや海浜リゾート、遊園地、スポーツ観戦といったものがあげられる。そうした様々な商業的な娯楽の中で、イギリスの場合、もっとも流行したものが海浜リゾートであった。19世紀末から20世紀中頃まで海浜リゾートは様々な階級の人々を魅了したのである。中崎(2001)は、*The Geographical Journal*を参考にし、イギリスの海浜リゾートは19世紀後半にかけて国内旅行として確立され、20世紀半ばに全盛期を迎えたことに言及した上で、1948年の全旅行者(4泊以上)の75%が海浜リゾートに出かけていることを指摘している<sup>84</sup>。海浜リゾートがなぜここまで大規模に流行し、1つの社会現象になりえたのか。その背景には、海浜リゾートに内在する複合的な要素がそれぞれの階級社会における余暇の指向性と一致していたことがある。では具体的にどのような点が海浜リゾートの魅力であったのか、それぞれの階級の指向性に注目しながら明らかにしていきたい。本章の流れは、4-2 貴族の海浜保養 4-2-1 スパルタ式海水治療 4-2-2 リゾートの発展、4-3 中流市民の海浜リゾート、4-4 労働者階級の海浜リゾート 4-4-1 伝統的な水浴びの習慣、4-4-2 大衆化への前提条件、4-4-3 海浜リゾートの発展ーブラックプールを事例にしてー、4-5 第4章のまとめ、と順に考察を進める。

### 4-2 貴族の海浜保養

海浜リゾートがはじまるきっかけは、特権階級の人々が18世紀後半に入り精神的な病を治療するために浜辺を訪れたことであった。それまで海に対するイメージは、聖書に記されていた天変地異の様子や船旅で遭遇する恐ろしい海獣の絵画などによって、地上とは異なり混沌とした恐ろしい世界でしかなかった。そうしたイメージを払拭したのが自然神学の影響である。自然神学の自然観とは、神が創造した自然界に価値をおき、人間が病に冒された場合には、神が人間のために必要な治療薬を自然界の中に残していることを示して

---

<sup>84</sup> 中崎(2001), p7

いる。それまでとはまったく相反する自然界に対する解釈に初めのうちは誰もが戸惑いを隠せずにとらえよう。浜辺に出かけた貴族も当初はまだ中世の恐ろしい海のイメージを捨て去ることができず、海水に浸るという行為に対して抵抗感や嫌悪感を抱いていた。当時の浜辺はまったくの不毛地帯であったため、こうした場所がその後華やかなリゾート地帯になることなど誰も想像がつかなかったことだろう。まさに 18 世紀後半から貴族が浜辺に出かけ、海水浴をするようになったということは画期的な出来事だったのである。そうした歴史的・社会的背景の中で、浜辺がどのような過程を経て貴族の社交場となりえたのか、明らかにしていきたい。

#### 4-2-1 スパルタ式海水治療

貴族の人々にとって余暇とは特権であり、豊かさの象徴であった。そうした特権階級の人々が最新の流行や娯楽を求めて訪れていた場所が内陸部に位置するバースであった。バースは中世以来温泉街として繁栄したが一時衰退の一途をたどった。しかし 18 世紀に入り都市整備を進め、娯楽施設や宿泊施設を建設することによって再びバースはイギリスでもっとも華やかで優雅な社交場として繁栄していた。こうした温泉施設だけではなく、舞踏会やゲーム、音楽会、芝居など様々な「洗練」された娯楽施設があったからこそ貴族のあり余る時間を満たすことができた。華やかに着飾っていた貴族にとって社交場で自己顕示することが何よりも重要であり悦びであったのである。

しかしながら、19 世紀に入りバースが洗練された社交場としての機能を失い始めると、代わりに海浜リゾートが貴族にとって新たな娯楽場所として確立されることとなった。その社会的・歴史的背景には、17 世紀の中頃にかけて特権階級を中心に憂鬱病（メランコリー）が蔓延していたことにある。17 世紀のイギリス社会は、オリバー・クロムウェル（1599-1658）によって共和制が確立されており、王党派であった貴族は政治的にも社会的にも権力を失いつつあったのだった。それが原因で貴族は憂鬱病に悩まされ、カントリーハウスで過ごす日々が長くなっていた。そうした社会状況の中で、1621 年にエッセイストであったロバート・バートン（1577-1640）が『メランコリーの解剖学』を公刊し、精神の治療にはまず住環境を慎重に選ぶ必要があることを説いた<sup>85</sup>。その中でバートンは、水平線を見渡すことができる高台が精神の回復を促すのにふさわしい場所であることを示した上で、身体を動かすことを貴族に勧めた。例えば、乗馬や釣り、水泳などがあげられる。またバートンは健康的で陽気な民衆の様子を注視し、民衆の伝統的な遊びを貴族に推奨していたのであった。そうした点についてコルバン（1992）は、バートンが民衆の明るく活発な身のこなしを貴族も模倣することによって憂鬱病に一定の効果を見込めることを主張したことによって、民衆の伝統的な娯楽が社会の内部に流通したのではないだろうかと指

---

<sup>85</sup> コルバン（1992），pp134-135

摘している<sup>86</sup>。貴族の人々は都会の喧騒から離れ、田舎暮らしをする中で何とか病状が回復するよう願っていたが、憂鬱病に悩まされていた人々は労働者のように恵まれた体力がなかったことにいつも不安や恐怖で押しつぶされそうになっていた。そうした中でジョン・フロイヤー（1649-1734）は、精神治療のためにバクストンの鉱水による冷水浴をその著書『風呂の正しい使い方に関する調査』（1697）の中で発表したことを皮切りに、『復活した古代の冷水遊び』（1702, 1706）、『冷水および温水浴の歴史』（1715, 1722）と立て続けに古代の冷水浴に関する歴史を取り上げた<sup>87</sup>。その中でフロイヤーは、ヒポクラテス、コエリウス、アウレリアヌスなどの歴史的に有名な医者や歴史家、皇帝などが冷水浴を推奨していたことについて説明しているだけではなく、冷水浴は一種の「浸礼」として、寒冷地に住む北方民族、スコットランド人、ウェールズ人の慣習として行われていたことを指摘している。コルバン（1992）は、フロイヤーの水治療の効用について以下のとおり引用している。

よく冷やした水をなにか浴びると寒気が走り、恐れや驚きに襲われた場合に劣らず、膜皮や神経の管が極度に収縮する。したがって、神経の管のなかを流れている希薄な体液は圧縮されて濃厚となり、そのぶん外部の現象が感覚力を具えた魂に伝わりやすくなる。寒冷期となると、外にむかって開かれた感覚がいよいよ研ぎ澄まされるばかりか、わたしたちの行動や推理思考を助けてくれる動物的な能力のはたらきも、冷気による外部からの刺激のおかげで、ふだんよりいっそう活発になる<sup>88</sup>。

当時の医学界では、血液、黄胆汁、黒胆汁、粘液の4つの体液によって健康であるかどうかを判定していたといわれ、憂鬱病を生み出すのは黒胆汁であるとされた<sup>89</sup>。当時は黒胆汁は冷・乾の性質を持っており、この部分に恐怖や驚きといった刺激を与えることによって回復に結びつくと考えられていた。冷水浴による精神治療の効用を信じていた医師ジョン・スピードは海水浴の治療効果を実証している。また医師ロバート・ウィッティは痛風の患者にスカーバラでの海水浴を促し一定の回復があったことを示している。このようにフロイヤーに賛同する医者は少なくなかったのである。またリチャード・ラッセル（1687-1759）もフロイヤーに共感した医師の1人で、海水のもつ効用を理論的に説明するために、1750年に『松果体の疾病における海水の利用』という本をラテン語で出版した<sup>90</sup>。この本の中でラッセルは、海水を服用すること、水浴びをすること、また新鮮な空気を吸う

---

<sup>86</sup> コルバン（1992）、p137

<sup>87</sup> 福田（1997）、p246

<sup>88</sup> コルバン（1992）、p147

<sup>89</sup> コルバン（1992）、p147（\*1を参照）

<sup>90</sup> 中崎（2001）、p4

ことなどが健康の増進に結びつくことを示している。具体的な治療方法としては、毎朝必ず半パイント（約 500ml）の海水を服用し、日に一度海水浴を行った後も必ずコップ一杯の海水を服用することが義務付けられていた<sup>91</sup>。ラッセルのこのような海水治療はスパルタ式の治療法と呼ばれており、貴族の療養者にとって大変過酷な治療法であった。しかもこの当時の海水治療を行うのに適った時期が冬場だったことから海水の冷たさは想像に難くないだろう。コルバン（1992）は、海岸で治療を行っていた女性の状況を次のとおり述べている。

水温 12 度から 14 度くらいの海水に頭から乱暴に沈められるとき、身を切るような冷たい感覚がともなう。（中略）浸水のもたらす身体的ショックは、感受性の中枢である横隔膜に作用する。呼吸を中断されたのち、女性海水浴客が息を切らして喘いでいるあいだ、「世話役」は力まかせに客の体をマッサージし、客の喘ぎが止み、体がほてりだし、悪寒がひくまでそれをつづける。（中略）召使いか公認の「世話役」のどちらかが、桶で海水を汲みにいっては前浜で 10 回ほどこの灌注をほどこす。体が冷水に慣れたころを見計らい、「案内役 guide」が許可を出すと、女性客は波だつ海にはいり、水のなかで飛び跳ねたり、ばたばた動きまわったり、体を摩擦したりする<sup>92</sup>。

ここでの「世話役」と「案内役」はどちらも同一人物であり、療養者を海水へ誘導したり指導したりする職業の人たちを指している。世話役の人びとは強引に療養者の身体をマッサージし、時には押し寄せた波を狙って治療を受けにきた貴族を水に沈めたり、窒息感を高めるためにあえて体を逆さずりにするなどしていた。少々乱暴な一面があったように思えるが、貴族の世話役であった人々は医学上の指示を忠実に守り実践していたらしい。こうした海水療法は長くても 15 分程度だったようだが、このような状況から察するに娯楽的な要素は微塵も感じられない。しかし冷水浴は最新の精神治療法として貴族の人々に支持されていたのである。コルバン（1992）は、1782 年にフランシス・バーニー（通称ファニー・バーニー）が早くから社交界ではなく、海水浴へ何度も足を運んでいた様子を以下のとおり指摘している。

スレールの奥さま、3 人のお嬢さん、それにこのわたし、みんな朝 6 時にいっしょに起床し、「月のほの明かりが砂金のように降りしきるなか」、渚まで足を運んだ。世話係の女たちには、用意をととのえてわたしたちを迎えるようにまえもつ

---

<sup>91</sup> コルバン（1992）、pp152-153

<sup>92</sup> コルバン（1992）、p166

ていってあったので、わたしたちは渚に着くと、さっそく大西洋に潜った。水は冷たかったけれど、爽快だった。わたしはもうなんども海水浴をしたことがあるので、いざ海水浴となっても怖くもなんともない。慣れっこになってしまっただけからというもの、これから海水浴と思うだけで力が湧き、心がはやるばかり<sup>93</sup>。

海水浴を行うバーニーはいかにも慣れた様子であり、そこにはもはや海に対する恐怖心はない。それどころかバーニーは治療としてではなく海水浴そのものを楽しんでいるように思える。しかしながら誰もがすぐに海水浴慣れしていたわけではなく、この頃はまだ療養という目的で浜辺を訪れていた貴族の方が多かったようだ。アーリ（1995）は、当初の海水浴の目的が人を健やかにするものとして位置づけていた<sup>94</sup>。つまり初めの頃は、組織化された真面目な医学的処方として海水浴が推奨されたのであり、娯楽というよりはむしろ治療の場であった。

#### 4-2-2 リゾートの発展

リチャード・ラッセルが1750年に『松果体の疾病における海水の利用』を出版してから治療に訪れる貴族が増加したので、彼はブライトン（当時はブライトヘルムストーン）に療養者が滞在できる保養施設を建設した。しばらくして外から目撃されるのを避けるために海水浴用の馬車がつくられた。1753年にベンジャミン・ビール（1719-1775）によって初めてマーゲイトで海水浴用の馬車（ベイジング・マシン）が開発されると、服を脱いで準備している間に馬車がある程度の深さまで海の中に入ることができたので、人々は状況を見計らってドアを開け海水浴をすることができるようになったのである<sup>95</sup>。（図4-1参照<sup>96</sup>）

図4-1 ベイジング・マシン



<sup>93</sup> コルバン（1992），p168

<sup>94</sup> アーリ（1995），pp30-31

<sup>95</sup> 福田（1997），pp247-248

<sup>96</sup> [出所] Marsden（1947），p19

コルバン（1992）は、当時のベイジング・マシンの様子について以下のとおり具体的に示している。

海水浴馬車の内装は型式によってまちまちではあるが、ただどの馬車にも例外なく座席がしつらえてあり、座席はビロード張りのことが多い。馬車の後部に掛けられた、小さな梯子をよじのぼったときに羽織るコートやバーヌースが置いてあることもある。あとは、冷えた体を摩擦するためのブラシ、ティーポット、鏡がそろえば、用意は万端だ<sup>97</sup>。

ここで出てくるバーヌースはアラビア人が着る頭巾つきで袖なしの外套で、海水浴を終えたあとに利用されていた。貴族の療養者たちが何度も足しげく浜辺に出かけるようになると、次第に海水浴に慣れた者が増えはじめた。そうした人々は自由に水浴びをしたり、泳いだりと解放的な喜びを実感するようになっていった。1783年には後のジョージ4世が、海水浴の効用を耳にしてブライトンを訪れており、水浴びを初めて体験してからブライトンが大変気に入ったようで、後に彼の庇護の下、1787年には外見がイスラム寺院様式で、内装が中国的なイメージの離宮ロイヤル・パビリオンが建設された<sup>98</sup>。それが評判となりますます多くの富裕層が次第にバースではなくブライトンを訪れるようになっていった。18世紀後半から19世紀中頃にかけて貴族が健康や快楽を求めて各地の海水浴場に足を運ぶようになると、アセンブリールームやギャンブル施設、ダンスホールなど貴族の好みに合う施設が次々と建設されはじめた。

その後南部のブライトンを筆頭に、ウェイマス、ワーシング、サウスエンドなどの海岸線が次々とリゾート開発されると、裸体で海水浴をすることが品格に欠け見苦しいことであると位置づけられるようになり、水着を着ることが求められるようになった。1840年代に入ると女性の海水浴客は、シャツとズボンがつなぎのようになっている水着を着て海に入る事が定着していった。中崎（2001）は、「センサス報告書」を参考にし、バースの人口が1861年以降5.4万人、1881年代以降は5.2万人に対して、ブライトンの人口が1861年に7.8万人、1881年に10.8万人と増加していることを指摘しており<sup>99</sup>、海浜リゾートがまさにバースに代わる新しい社交場として注目されたことがうかがえる。

以上、歴史的・社会的な背景の中で、海浜リゾートがどのように成立していったのかを明らかにした。海浜リゾートはバースの社交場とは異なり、貴族は健康や社交だけではなく、海水浴をすることによってそこに開放的な喜びを獲得することができたのである。初

---

<sup>97</sup> コルバン（1992）， p177

<sup>98</sup> 松鷹（1997）， pp11-12

<sup>99</sup> 中崎（2001）， p5

期の海水治療が過酷な状況だったのにも関わらず、次第に特権階級の人々は海水浴を通して快楽を見出すことができたことから新しい自然の解釈が作りあげられ、心身共にその魅力に引き込まれることとなった。貴族は海浜リゾートを通して「特権的」なファッションとしての価値を見いだしていたのかもしれない。

#### 4-3 中流市民の海浜リゾート

中世までの海に対するイメージは、聖書に出てくる大洪水や天変地異の様子が描かれているような解釈であった。しかしながら自然神学の自然観によって人間と自然との関係性が大きく変容することとなった。18世紀後半から19世紀前半にかけて貴族は、海浜リゾートにおける健康や快楽、社交を求めている。中流層はそうした状況の中で貴族の海浜リゾート生活を模倣するだけでなく、ロマン主義的な「崇高」の美を海岸線に見いだすことで「知的」な余暇を過ごしていた。コルバン（2007）は、自然そのものの「崇高」な美の追求について以下のとおり検証している。

雷雨や暴風雨や嵐の体験、そして一般的に言って山、海、森、砂漠、大平原など、それまで嫌悪の対象にすぎなかった無限の空間に向けられた視線が、崇高美の規範によって根底から刷新された<sup>100</sup>。

自然に対する解釈は時代によって共通の認識を示しているわけではない。19世紀初頭に中流市民層を中心にロマン主義的な自然観が流行することによって、海辺は恐怖の対象からその荒々しい自然そのものの姿を荘厳な美しさとして捉えられるようになった。つまり人間が自然の中に入ることでそれまでとはまったく異なった評価の対象として山や海などにまなざしを向けるようになったのである。コルバン（2007）はさらに自身の経験を照らし合わせて考察を加えている。

崇高美の領域に属する影響はロマン主義作家たちによって修正され、そこにさらに多感覚的な悦びを求める意志、つまりあらゆる感覚を通して自然の力と共鳴したいという欲求が加わる。（中略）私見によれば、風に髪をなびかせ、裸足で砂浜を歩く時に覚える快感は、つつましいものとはいえ、このような評価の豊かさに由来する<sup>101</sup>。

浜辺は新しい貴族の社交場として人々の注目を集めていたが、それと同時にロマン主義

---

<sup>100</sup> コルバン（2007）、p31

<sup>101</sup> コルバン（2007）、pp35-36

的な自然観が 19 世紀初頭から流行することによって、イギリスの中流層が貴族と同様に海辺に関心を持ち足しげく通うようになっていった。では具体的に中流市民はどのような余暇の過ごし方をしていたのだろうか。荒井（1989）は以下のとおり指摘している。

彼ら（中流市民層）が上流階級の優雅なライフスタイルを模倣するようになると、2～3 週間の海辺の休日（seaside holidays）が中流階級のステイタスを象徴する夏の行事として、次第に定着していった。働き者の中流階級はリゾートライフも堅実で、海水浴、散策、乗馬、植物採集、小石や貝の採集、古代遺跡の訪問、ダンス、カード遊びなどが主たる楽しみであったという<sup>102</sup>。

中流市民層は比較的落ち着いた海浜リゾートを選び、なるべく静かに節度のある余暇を過ごしていた。Walton（1983）は、18 世紀後半から貴族を模倣してジェントリーや中流層が比較的静かな海浜リゾートであるマーゲイトやラムズゲイトへ出かけ友人と会っている様子を示しているほか、北部に住むある程度裕福な商人がスカーバラで海水浴をしていた事実に触れている<sup>103</sup>。また Walton（1983）は、ライム＝リージスに主に常連でやってくる中流層について言及し、彼らは華やかであり浪費しやすいリゾート地を避けるようにして、あえて控え目な海浜リゾートを選んでいたことについて説明した上で、中流市民の人々は健康回復を願っていただけではなく、仕事で使い果たしてしまった幸運を再び手に入れるため、また底をついた収益を再び満たすために精神の回復を願い海浜リゾートを訪れていたことを明らかにしている<sup>104</sup>。以上のことから経済的に厳しい状況にも関わらず外に出かけて余暇を過ごすことが重要なステイタス・シンボルになっていたことがうかがえる。荒井（1989）も同様に、海浜リゾートに出かけることは中流層にとってステイタスを象徴する夏の行事であったことを指摘した上で、冬場は温暖なドーバー、トーキー、ワイト島のヴェントナーなどを訪れていたことを説明している<sup>105</sup>。また Walton（1983）は、中流市民がこのように自らの余暇を実践していることに言及した上で、ヴィクトリア朝に入ってから貴族や中流階級が家族で海浜リゾートに出かけるようになったことを取り上げて、砂浜が子供にとってごく当たり前の遊び場となっていったことを明らかにしている<sup>106</sup>。

以上のことから、中流市民の海浜リゾートでの過ごし方は、いたって「真面目」である。貴族の余暇の過ごし方を模倣しているだけでなく、模倣しながらも中流的な海浜リゾートの過ごし方を市民層の人々は実践し自らの信念を誇示していることが理解できる。中流

---

<sup>102</sup> 荒井（1989），pp121－122

<sup>103</sup> Walton（1983），pp14－15

<sup>104</sup> Walton（1983），p17

<sup>105</sup> 荒井（1989），pp121－122

<sup>106</sup> Walton（1983），p17

市民層にとって海浜リゾートとは、海岸線を散策することで自然の美を感じることができる場所でもあり、浜辺で読書をしたり、石や貝を拾ったりと「知的」であり好奇心を刺激する魅力的な場所だったに違いない。また貴族と同様に、海浜リゾートでの健康法は中流層にも受け入れられていたため、市民は競争社会である都会の喧騒からしばらく離れ、水浴びや浜辺の空気を吸うことによって精神的にも肉体的にも回復できることを望んでいた。

#### 4-4 労働者階級の海浜リゾート

19世紀の後半に入ると上流層や中流階級だけではなく、海浜リゾートに労働者層が訪れるようになっていった。そのきっかけは19世紀後半から鉄道の往復チケットが安価な料金で労働者に提供されたことにある。しかしながらそれ以前から実は、労働者階級独自の伝統的な水浴びの習慣があった。こうした歴史的背景をふまえた上で、どのように海浜リゾートが大衆化していったのか、検証していきたい。

##### 4-4-1 伝統的な水浴びの習慣

特権階級の人々が治療や社交を求めて海浜リゾートに訪れるようになると、次第に中流市民層が貴族のリゾートライフを模倣しながらも自ら真面目な過ごし方を海浜リゾートで実践していたことにより、新しい余暇のスタイルが定着していった。こうした裕福な階級の人々によって海浜リゾートがつくりあげられていったが、一方で古くから民衆の伝統的な慣習であった水浴びの習慣が残っていた。特にイギリス北西部に位置するランカシャー州やウェールズ地方で昔から民衆が水浴びを実践しており、近代以降も水浴びの習慣が残っていたようだ。(4-4-3 にブラックプールにおける伝統的な民衆の水浴びについて取り上げている。) Walton (2002) は、民衆の慣習として水浴びや海水飲用がありそれらが治療方法として残っていたことに言及した上で、こうした民衆の伝統的な治療行為が理論づけされることによって、海水治療を利用した企業家が富裕層向けに新しい流行をつくりあげたのではないかと指摘している<sup>107</sup>。もちろん貴族が快楽的な要素を見いだしたことによって浜辺がリゾートとして確立されたことに変わりはないが、海浜リゾートが成立した土台には民衆の土着的な要素が内在していたことをここでは示しておきたい。つまり多くの商業的な娯楽があるが、海浜リゾートが確立されたその潜在的な要素の中には下の階層から上の階層へと文化が広まった (trickle-up) 側面が少なからずあったのである。こうしたことから、海浜リゾートの複合的な要素の中には貴族にとっての快楽的な要素もあれば、中流的な洗練された要素もあり、また根本的な部分には民衆の伝統的な要素もあることなどから、海浜リゾートが確立されたその背景には、階級横断的に様々な要素が複雑に溶け込んでいることがうかがえる。しかしあくまで海浜リゾートが治療だけではなく余暇を過

---

<sup>107</sup> Walton (2002), p117

ごす場所としてつくりあげられた背景には貴族の功績が大きかった<sup>108</sup>。

#### 4-4-2 大衆化への前提条件

19 世紀の前半は労働者階級が居住地を離れて海浜リゾートに出かけるほどの余裕は時間的にも経済的にも皆無であり、交通も整備されていなかったのが実情であった。しかしながら、19 世紀後半に入ると労働者の労働効率を高めるためには、ある程度の余暇の必要性を中流市民層が認識し始めていたのである。では経済的・社会的・制度的な面に視点をおき、労働者の生活環境がどのように変容していったのか、具体的に 4 つの点に絞り明らかにしていきたい。まず 1 つ目は、労働者の余暇時間の拡大である。1847 年に 10 時間労働が正式に認められると、1850 年には工場法が改正され土曜日の労働時間を半分にする土曜半ドンが決定された。また 1871 年には銀行休暇法 (Bank Holiday Act) が制定されたこと、さらに国民の休日 (イースターやクリスマスなど) などが成立したことによって、労働時間の縮小だけではなく休日制度が法的に認められることによって自由時間が以前に比べて大幅に増加した。2 つ目は、経済的な面が改善されたことである。中崎 (2001) は「ビクトリア時代の『レジャー革命』と交通革命」を参考にし、実質賃金が 1850 年を 100 としたときに、1860 年に 105、1870 年に 118 と次第に上昇していることを指摘している<sup>109</sup>。またアーリ (1995) も一人当たりの実質賃金が 19 世紀のあいだに 4 倍になっていることに言及し、労働が作業志向から時間志向へと移行し、労働それ自体が金銭的に評価されるようになったことを指摘している<sup>110</sup>。さらに当時のヴィクトリア朝では、「節約」することが道徳的に優れた習慣であったとした社会的風潮があったことから、次第にパブに出かけることよりも海浜リゾートへ出かけるために賃金を積み立てる労働者が出てきた。3 つ目は交通事情の改善である。アーリ (1995) によると、18 世紀末はバーミンガムからブラックプールまで旅行に出かけると 3 日かかり、マンチェスターからブラックプールまでは丸一日かかっていた背景を説明した上で、1830 年代に入り有料道路整備会社が誕生し、国内の道路網が改善されたことによって旅行の所要時間が驚異的に縮小されたことを指摘している<sup>111</sup>。当初の鉄道旅行はある程度裕福な貴族や中流層が旅行客の対象者であったが、1844 年に鉄道法が改定されると労働従業者階級への便宜が義務付けられることによって、鉄道会社は労働者層を受け入れざるをえなくなった。しかしその頃から労働者の所得向上により、か

---

<sup>108</sup> 「伝統的」な水浴びの習慣以外に貴族と同様に療養していた民衆もいたようだが、それは重い病気にかかってしまった患者に限定されていた。Walton (1983) によると、慈善事業者が後援することによって、療養に苦しむ貧しい患者のための病院がマーゲイトに開設され、1850 年までに 22,000 人の患者を受け入れていたことに言及しているほか、さらに 19 世紀初頭にはサウスポート、スカーバラ、ブライトンがマーゲイトと同様の措置をとり、受け入れ人数を限定し、富裕層からは見えないように少し離れた場所で民衆を療養していたことについて説明している。Walton (1983), p26

<sup>109</sup> 中崎 (2001), p7

<sup>110</sup> アーリ (1995), p33

<sup>111</sup> アーリ (1995), p37

えて労働者層の旅行市場に鉄道会社は可能性を感じるようになっていった。そして鉄道会社は大幅な運賃の引き下げを実施し、労働者は格安料金で旅行に出かけることができるようになったのである。松鷹（1997）は「ブライトンまで行って帰って 3 シリング半」という決まり文句が 1850 年代に流行していたことを指摘しており<sup>112</sup>、鉄道会社や事業家が労働者層に対してレジャーへの意向や支出を促していたことがうかがえる。4 つ目は当時の社会改革であった合理的レクリエーションの導入である。社会改良家は野蛮な娯楽に耽る労働者を啓蒙するために近代的な教育の一環として音楽やキャンプ、遠足などを企画した。なかでもエクスカッションという名目で労働者層を海浜リゾートに連れて行った禁酒運動家は、なんとか労働者層を伝統的な娯楽から切り離し健全な余暇へと彼らを導くことができるように努力していた。

以上のことから、海浜リゾートが大衆化するには労働者階級を取りまいている経済的・社会的・制度的な環境の変革が不可欠であったことはいままでもない。ここで注目しておきたいことは、労働者層の人々が近代後半から所得が向上し、自由時間が確保されたからといって外に出かけることができたわけではないという点である。つまりそれまで伝統的な娯楽に浸っていた労働者は空間的・時間的にも限られた居住地域以外で娯楽活動することが珍しいことであったこと、また近代的な余暇を過ごすことに抵抗を示していた労働者層が多かったことから、労働者階級の人々が自由時間に海浜リゾートに出かけるようになるまで地域によって違いが見られたのではないだろうか。そうした社会状況の中で瞬間に大衆化した場所がブラックプールであった。では労働者が海浜リゾートに出かけた際、どのような指向をもって浜辺を訪れていたのか、ブラックプールを事例にとりあげることによって、分析していきたい。

#### 4-4-3 海浜リゾートの発展ーブラックプールを事例にしてー

19 世紀後半から新たに労働者階級が海浜リゾートに関心を抱き出かけるようになる。特に工業都市からほど近いブラックプールには労働者が急増していた。それまで富裕層が訪れていたブラックプールがどのような過程を経て労働者に受け入れられるようになったのだろうか。ブラックプールの発展の過程を検証することによって、労働者階級の指向性がどういった部分にあるのかを明らかにすることができると思う。ブラックプールはランカシャー州北部に位置しており、裕福な大土地所有者は少なかった。アーリ（1995）によると、ブラックプールは小地主たちが中心となりリゾート開発を行っていた<sup>113</sup>。鉄道開設以前は中流層が中心となってしばしば海水浴を行っていたようで、当時の海水浴の様子について荒井（1989）は以下のとおり示している。

---

<sup>112</sup> 松鷹（1997）、p22

<sup>113</sup> アーリ（1995）、pp40-44

鉄道が開通する以前、夏のブラックプールには、ゆとりのある人びとが馬車で海水浴に来ていた。浜辺には未だ何の設備もなかった。海水浴では男も女も裸で、男女の区切りもない。海水をガブ飲みする前に大量の酒を飲む習慣があったらしい<sup>114</sup>。

またWalton (1983) はこのように海浜リゾートを訪れていた比較的裕福な階層の人々は“*The Padjammers*”と呼ばれていたことを説明している<sup>115</sup>。当初の富裕層の様子はどちらかというと庶民的な振る舞いをしていたことが垣間見える。しかしその後ヴィクトリア朝の規範に基づいた生活習慣が確立されていくと、混浴は道徳性に欠けた振る舞いであると社会的に位置付けられるようになり、ブラックプールの市当局によって独自の規制を設定した。それぞれ男女の海水浴の時間を配分することによって、女性が海水浴をしている間、男性は海岸沿いで待機し、ベルが鳴ると交代して入るようになっていったのである<sup>116</sup>。このような海浜リゾートの規則はほかの地域にも見られていたが、この地域には他にも変わった特徴がみられた。それが労働者の伝統的な水浴びの習慣であった。19世紀前半、ブラックプールでは8月から9月にかけて都市部に住む労働者が伝統的な水浴びの習慣にやってくることも少なくなかったことをコルバン (2000) は次のように指摘している。

1813年、ブラックプールは当時小さな村だったが、ランカシャーの産業都市の貧しい労働者が好んで行くところとなっていた。そこには、「8月と9月には海が治療薬——医者のところにある全ての薬の全ての効用を備えていて、もちろんだんな種類の病も治癒するような、最も完全な治療薬——のように作用するとし、海水浴の効用を確信している、マニユファクチュアの街からやってきた貧しい群衆」が殺到してきた<sup>117</sup>。

またコルバン (2000) は、事業家がビジネスのチャンスとして毎年水浴びに訪れていた労働者に注目し、鉄道の導入と同時に団体旅行を労働者層に提案したことでブラックプールの大衆化が起こったのではないかと示している<sup>118</sup>。確かにランカシャー地方に住む労働者層は他の地域よりも一人当たりの実質賃金が比較的高い上に、早くから休暇制度を導入

---

<sup>114</sup> 荒井 (1989), p125

<sup>115</sup> Walton (1983), p11

<sup>116</sup> Stokes (1947), p21

<sup>117</sup> コルバン (2000), p45

<sup>118</sup> コルバン (2000), pp45-46

していた<sup>119</sup>。また禁酒運動のキャンペーンの一環として実施された合理的レクリエーションが提供されていたこともあり、労働者層の海浜リゾートに対する関心は高まっていたのかもしれない。鉄道を利用することによって日帰り旅行が可能になると、伝統的な水浴びや合理的レクリエーションなどで訪れる労働者階級の人びとが増加し始めたのである。アーリ（1995）はそれまで特権的なリゾート地であったブラックプールの変容について *Beside the Seaside* から次の文章を引用している。

ただちに何らかの措置をとらないと、紳士淑女のためのリゾート地ブラックプールは壊滅してしまうであろう…。割引列車を中止するか、あるいはここを訪れる何千の客の制限をするための何らかの効果的な規制が設けられないと、ブラックプールの価値は取返しのつかないくらい下落してしまうであろう<sup>120</sup>。

それまで富裕層が独占的にブラックプールの浜辺を訪れていたが、鉄道の運賃が安くなると、労働者層の中で日帰り客（day-tripper）が来るようになり、しばしば富裕層が社会的な秩序が乱れるとして労働者の受け入れを禁止するよう鉄道会社に要請をしていた。しかしながら、ランカシャー地域の工場労働者たちは1840年代にはすでに日帰りで海浜リゾートを訪れていたことから、ブラックプールが大衆化するのとは避けられない状況だった。Walton&Poole（1982）によると、19世紀中頃までは日曜日の半日を海浜リゾートへ出かけて過ごし、夕方には地元に戻り祝祭に参加していたことが示されている<sup>121</sup>。しかしその後、事業家の手によって労働者の指向に見合った娯楽施設の開発が次々と進められた結果、ブラックプールを訪れる労働者が急増していった。1863年から1893年までに3つの栈橋がブラックプールに設けられる。また1871年には遊園地会社が設立され、51エーカー（6万2000坪）の敷地を利用して、温室、劇場、舞踏会、動物園、遊園地など様々な娯楽施設が建設された。労働者は伝統的な娯楽よりもブラックプールの洗練された娯楽施設に魅了され、サーカスや人形劇、アクロバットのショー、ジェットコースター、ロバを利用した砂浜の散歩など様々な娯楽に酔いしれていた。また1894年にはブラックプールに塔が建てられ、あとから観覧車を取り付けられるとますますブラックプールへの関心は高まるばかりであった。このような娯楽施設がブラックプールに建設されたことで、19世紀の前半までは特権的な海浜リゾートに過ぎなかった場所が、19世紀後半から20世紀にかけて労働者を中心とした一大観光名所として発展するのであった（図4-2参照<sup>122</sup>）。

コルバン（2000）はこうしたブラックプールの状況について以下のとおり言及している。

---

<sup>119</sup> アーリ（1995）、p35

<sup>120</sup> アーリ（1995）、p38

<sup>121</sup> Walton&Poole（1982）、p113

<sup>122</sup> [出所]BBC NEWS の In Pictures: Blackpool Pleasure Beach の写真の中の1枚。  
[http://news.bbc.co.uk/2/hi/in\\_pictures/4471322.stm](http://news.bbc.co.uk/2/hi/in_pictures/4471322.stm) (downloaded at 2009/12/08)

その派手な色彩と音楽、賑やかな音とお祭り気分、家族や子供を楽しませようとする気遣いによって、海水浴場は、ヴィクトリア朝のイギリスにおいて、成りゆきにまかせ、節度を忘れることができる数少ない場の一つとなった<sup>123</sup>。

図4-2 ブラックプールの様子（1905年）



このように社会の風潮とは相反する発展をブラックプールはしていく。その背景には、ヴィクトリア朝における合理的で規律的な生活習慣の統制に疲れ切っていた労働者がこうした大規模な娯楽施設に出かけることで唯一「節度」を忘れることができたのである。つまり労働者階級の余暇の指向性は、前近代社会におけるウェイクやフェアといった華やかな「祝祭性」や「非日常性」を求める傾向が残っていたからこそ商業的な海浜リゾートは発展したのではないかと分析する。しかし一方で労働者の余暇の過ごし方は、近代以降に成立したヴィクトリア朝の規範とは矛盾したものであったといえる。

#### 4-5 第4章のまとめ

以上、階級ごとに海浜リゾートでの余暇の指向性について考察してきた。近代後半以降イギリスの場合、階級横断的に海浜リゾートを訪れる人々が多かったことが理解できた。その理由には海浜リゾートに内在する多様な魅力にあった。バースの代わりに新たな社交場として海浜リゾートを発見した貴族が新しい自然の魅力を発見し開放的な悦びを見いだしていった。また中流市民の人々はロマン主義的な観点から海浜リゾートに出かけ、海岸線を散歩したり、浜辺で読書に耽ることによって、海浜リゾートにおける知的な魅力にひかれていった。労働者階級の人々は、海浜リゾートにおけるカーニヴァル的な娯楽施設に魅了されていった。そうした限られた空間や時間の中に労働者層は現実社会のはげ口を求めていただけではなく、労働者の人々は気晴らしを図っていたのである。Walton (1983)

<sup>123</sup> コルバン (2000), p47

はこうした海浜リゾートがもつ複合的な要素についてふれ、海浜リゾートは違った指向をもった人々を受け入れる柔軟性（flexibility）があること示している<sup>124</sup>。つまり海浜リゾートがイギリスで発展した背景には、このようにそれぞれの階級ごとに違う娯楽の指向性があるにも関わらず、海浜リゾートはその潜在的な柔軟性によって階級横断的に人々を受け入れていたのである。以上のことから近代後半以降、海浜リゾートに出かけた人びとは、それぞれの階級意識の中で、自らの娯楽の指向にあった余暇の過ごし方を選択し実践することによって、自由時間を享受することができるようになったことがうかがえた。

---

<sup>124</sup> Walton (1983), p43

## 終章

前近代から近代にかけてのイギリス社会に焦点をあて、「労働以外の時間」(spare time)が「自由時間」(free time)へと変容する歴史的・社会的な背景を考察することによって、娯楽の時間が時代によってどのように位置づけられているのか明らかにした。また、階級によって娯楽の指向性に違いが見られるのかどうか検証した上で、娯楽活動を通して、階級間の関係性はどのようなものであったのか、検証を試みた。

まず第2章では、前近代のイギリス社会に焦点をあて労働以外の時間の位置づけと、それぞれの階級社会における娯楽の指向性を分析した上で、娯楽を通して階級間における関係性はどのようなものであったのか、考察を加えた。農村社会の労働は天候の変動や行事によって一時的に中断されていたことから、たびたび労働以外の時間が点在していた。労働時間と労働以外の時間の区切りは非常に曖昧なものであったことがわかった。労働以外の時間は共同体を維持する上で重要な社会的役割を果たしていた。その理由は、民衆が多種多様な祝祭やブラッド・スポーツなどの娯楽活動に参加している間、非日常的な振る舞いや言動が特権階級によって許されていたからである。非日常的な世界の中で現実社会の抑圧された環境から解放されただけではなく、民衆は労働以外の時間を使い人間関係の修復や再確認をおこなっていた。貴族はそうした一時的な娯楽活動を積極的に後援することもあれば、貴族が伝統的な娯楽活動に参加することもあった。つまりそうした民衆と貴族の関わり合いが娯楽を通してあったことから、民衆の伝統的な文化を貴族が尊重していたことがうかがえる。労働以外の時間は、共同体を維持する上で重要な時間であり、民衆と特権階級の人々はそうした娯楽の時間を「共有」することによって共同体の安定を図っていたことから、それぞれの階級間には「柔軟な相互理解」があったのではないかと分析する。

第3章では近代のイギリス社会に焦点をあて、近代以前の労働以外の時間がどのように変容し、余暇が確立されたのか検証した。その上で、中流市民と労働者階級の人々に焦点を絞り、それぞれ階級ごとにどのような娯楽の指向性があったのかを明らかにした。そして近代社会に入ってから娯楽活動における階級間の関係性はどのようになったのか、考察を試みた。近代に入ると資本主義経済の下、工業や産業の発展に伴い、人間はその日の作業量ではなく時間によって束縛されるようになった。それまで農民として働いていた民衆の多くが土地の困り込みによって仕事を失ったため、民衆は都市部に移住し工場労働者として働き始めることとなった。近代初期は、公的に娯楽の時間が認められていなかったため、労働者は長時間の労働を課せられていた。しかしながら工場での過酷な労働や規則にうんざりしていた労働者層は、工場の労働時間や規則を頻繁に破り娯楽に耽っていた。いずれは生まれ育った農村社会に戻ることを夢見ていたのである。こうした状況から、はじめの

うちは工場経営者の多くがいかに労働者の生活態度を改善することができるのか悩んでいた。1847年に10時間労働法が制定されると、労働と余暇が明確に分離され自由時間が確立されることとなった。それまでの労働以外の時間とは異なり、個人が自由な判断で娯楽を享受することができるようになった。そうした社会状況の中で、当時社会的にも政治的に確実に権力を持ちはじめた中流層の人々は一市民としての自覚を持ちはじめ、貴族に代わる新たな社会的指導者として社会改良や禁酒運動などの政策に取り組むようになった。中流市民は自らの信条こそ近代社会の規範にふさわしいものであると位置づけ定着させ「普遍化」させようとしたのである。そうした中流的な社会規範に共感していた工場経営者たちは社会改良家とともに労働者層の生活改善を進めた。まず彼らが行った社会改良は伝統的な娯楽活動の排除であった。それまでの祝祭行事やブラッド・スポーツは「危険」な遊びとして社会的に位置づけられ、伝統的な娯楽は中流層によって徹底的に攻撃された。次に労働者を啓蒙するため社会改良家や禁酒運動家が行った政策は合理的レクリエーションの普及であった。読書や散歩、遠足といった近代社会にふさわしい娯楽を中流層が労働者層に提供することによって、中流市民の人々は労働者の人格を中流的なものに改良しようとした。このように合理的レクリエーションの目的は、労働者層を伝統的な娯楽から切り離し、代わりに近代にふさわしい「健全」な娯楽を中流市民層が労働者に提供することによって、最終的には、労働者層が近代社会の規範に見合った人格を身につけることにあった。しかしながらこうした娯楽の統制はあくまで中流的な理念に基づいていたため、労働者層に受け入れられるものではなかった。労働者階級の娯楽の指向は農村社会のときのように現実社会の抑圧から解放されることであり、非日常的な振る舞いが許される娯楽の時間を労働者は求めていた。つまり労働者の余暇の指向性は根本的に変わることがなかったのではないだろうか。

では近代以降、中流層と労働者の間には娯楽を通してコミュニケーションが成立していたのだろうか。工業化以前は、商人や親方、職人、使用人などを含めて家族と位置づけられ、職住一致の形態が成立していた。しかしながら家庭と仕事の現場が分離したことによって、同じ階級の者同士が関わり合いをもつ時間が増えていった。一方で地位や富を手に入れた裕福な人々は郊外に移り住むことによって空間的・時間的にも労働者階級との距離が広がっていったのである。さらに近代に入り中流層によって「個人」の余暇活動が推奨されたことにより、違う階級同士が娯楽を通して相互理解をする機会は失われてしまったのではないかと推測する。

第4章では第3章をふまえて、大規模に発展した海浜リゾートを事例として取り上げ、階級ごとにどのような指向性の違いが見られるのか考察した。海浜リゾートの起源は、18世紀中頃に貴族が精神的な治療の場として訪れていたことがきっかけであった。海浜リゾートを訪れていた貴族は海水浴に慣れることで治療としてだけでなく、そこに快楽的な悦

びを見いだしていった。バースに代わる新たな社交場として海浜リゾートは確立され、華やかな舞踏会やコンサート、ゲームなどの娯楽施設が次々と浜辺の周辺に建設されていった。中流市民層の中には貴族の指向性を模倣し華やかな社交界に進出した者もいたが、たいていの市民層は中流的な娯楽の過ごし方を実践していた。中流市民の人々は海浜リゾートで読書をしたり散歩をしたりとある程度節度のある娯楽の時間を過ごしていたのである。初めのうちはこのように海浜リゾートは特権的な場所であったが、19世紀後半に入り、経済的にも時間的にも余裕が生まれた労働者層が鉄道を利用して日帰り客（day-tripper）として海浜リゾートをたびたび訪れるようになった。その後、労働者層の市場に注目した企業家が、大衆の指向性に見合った娯楽施設を海浜リゾートの周辺に次々と建設しはじめた。例えばタワーやピア（棧橋）、劇場、遊園地、スケートリンクなどであった。ありとあらゆる娯楽施設の投資を企業家が行うことでそれまでの洗練された海浜リゾートではなく、商業的な海浜リゾートが誕生した。事例でも取り上げたようにブラックプールには労働者の指向性に見合った娯楽施設が立ち並び、限られた範囲で非日常的な時間を労働者の人々は享受することができるようになった。富裕層からの批判の声があっても関わらず、労働者の市場をビジネス・チャンスとしてとらえた企業家が労働者の指向性に合わせカーニヴァル的世界を海浜リゾートにつくりあげたのである。労働者は自由時間を巧みに利用し、限られた時間・空間の中で非日常的な気晴らしを獲得することができたのである。以上のことから海浜リゾートが大規模に発展した背景には、それぞれ階級ごとに違った娯楽の指向性があったにも関わらず、それに見合う複合的な要素を海浜リゾートが内在していたことがうかがえた。

第2章から第4章まで前近代から近代にかけてイギリス社会に焦点をあてて考察してきた。農村社会における共同体を維持する上で義務的な労働以外の時間から、近代における個人の指向性に見合った自由時間へとイギリス社会は変容していった。自由時間の創出に伴い、中流市民の社会改良家や禁酒運動家は労働者に合理的で節度のあるレクリエーションの提案を図ったが、近代後半以降に商業的な余暇（leisure）が誕生することによって、合理的レクリエーションの活動は衰退していった。商業的な余暇が確立されたことによって、自由時間の中で労働者はカーニヴァル的な気晴らしをすることができたのである。つまりヴィクトリア朝の社会規範とは相反しており、労働者は節度を忘れて自らの指向性に見合った娯楽の時間を過ごしていたのである。イギリスの場合、近代的な娯楽は表面的には定着し、社会全体が中流的な理念に基づいて統制されたように思われるが、実は必ずしもそう言い切れない部分があるのではないかと考察する。すなわち自由時間は確かに確立され、個人がそれぞれ娯楽を自由に享受することができるようになったが、しかしながら、労働者層は自由時間を巧みに利用し、中流層の理想に反して「集団的」「カーニヴァル的」な娯楽を選択していたのではないだろうか。また近代以降の娯楽活動における階級間の関係性につ

いて分析を試みたが、事例を通してみると明らかに階級間の隔たりが垣間見えた。果たして娯楽を通して階級間の関係性は失われてしまったのだろうか。今後も様々な側面から慎重に検証していかなくてはならない。

## 謝辞

本研究の執筆にあたり、まず指導教員である西川克之先生に心からお礼申し上げます。大学院に入った当初はどのように研究を進めるべきか悩み、焦っておりました。しかしながら、西川先生から様々な文献を紹介していただいたおかげで、幅広い知識を得ることができただけでなく、つねに客観的、論理的に物事を考える柔軟な姿勢が大切であることに気づくことができました。

また私の稚拙な文章に対して、西川先生は一文一文丁寧に指導してくださいました。未熟者で申し訳ありません。まことにありがとうございました。

また副指導教員である宮下雅年先生は、論文執筆の手順や論述の仕方について分かりやすく教えてくださいました。また論文の執筆に必要な文献をお貸ししてくださいました。厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

最後に石森秀三先生をはじめとする先生方、大学院生の皆さまから多くの貴重なアドバイスをいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2010年1月  
平川 知佳

参考文献

(日本語文献一覧)

荒井政治『レジャーの社会経済史：イギリスの経験』（東洋経済新報社、1989年）

荒井政治「ビクトリア時代の『レジャー革命』と交通革命」『関西大学経済論集』  
34-6、1985年。

荒井政治・内田星美・鳥羽欽一郎編、『産業革命を生きた人びと』（有斐閣、1981年）

新井潤美『階級にとりつかれた人びと 英国ミドル・クラスの生活と意見』  
（中央公論新社、2001年）

アグニュー・ジャンークリストフ、中里壽明訳『市場と劇場－資本主義・文化・表象の危機  
1550-1750年－』（平凡社、1995年）

アーリ・ジョン、加太宏邦訳『観光のまなざし』（法政大学出版局、1995年）

井野瀬久美恵『英国文化史入門』（昭和堂、1994年）

大野誠編、『近代イギリスと公共圏』（昭和堂、2009年）

川北稔『「非労働時間」の生活史－英国風ライフ・スタイルの誕生』（リプロポート、1987  
年）

川島昭夫「19世紀イギリスの都市と『合理的娯楽』」中村賢二郎編『都市の生活史』  
（ミネルヴァ書房、1983年）

岸野雄三・小田切毅一共著、『レクリエーションの文化史』（不味堂新書、1972年）

コルバン、アラン、福井和美訳『浜辺の誕生－海と人間の系譜学』（藤原書店、1992年）

コルバン・アラン、渡辺響子訳『レジャーの誕生』（藤原書店、2000年）

コルバン・アラン、小倉孝誠訳『風景と人間』（藤原書店、2002年）

コルバン・アラン、小倉孝誠訳『空と海』（藤原書店、2007年）

近藤和彦『民のモラルー近世イギリスの文化と社会ー』（山川出版社、1993年）

オシキキ指昭博編『祝祭がレジャーに変わるときー英国余暇生活史』（創知社、1993年）

指昭博編著、『生活文化のイギリス史ー紅茶からギャンブルまで』（同文館、1996年）

朱牟田夏雄編『イギリスの生活と文化』（創元社、1959年）

菅原秀二「民衆文化とその変容」岩井淳・指昭博編、『イギリス史の新潮流ー修正主義の近世史ー』（彩流社、2000年）

瀬沼克彰「西欧にみる工業化社会の余暇思想」『経営政策論集』8-1、2009年。

高橋裕子・高橋達史『ヴィクトリア朝万華鏡』（新潮社、1993年）

角山榮・川北稔・村岡健次『産業革命と民衆』（河出書房新社、1992年）

トレヴェリアン・G・M、藤原浩・松浦高嶺訳『イギリス社会史 1』（みすず書房、1971年）

トレヴェリアン・G・M、松浦高嶺・今井宏共訳『イギリス社会史 2』（みすず書房、1983年）

富沢霊岸著、『イギリス中世文化史』（ミネルヴァ書房、1996年）

内藤則邦著、『イギリスの労働者階級』（東洋経済新報社、1975年）

中崎茂、「リゾート地域の変遷とその要因に関する考察ーイギリスのマス・ツーリズムの誕生とその変容を中心にー」『流通経済大学論集』35-3、2001年。

中島俊郎『イギリス的風景』（NTT出版、2007年）

長島伸一著、『世紀末までの大英帝国』（法政大学出版局、1987年）

西川克之、「余暇と祝祭性 近代のイギリスにおける大衆の余暇活動と社会統制」『観光創造研究』No.6、2009年。

ハーバーマス・ユルゲン、細谷貞雄・山田正行訳、『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求—』（未来社、1973年）

福田真人、「風呂と海水浴—19世紀英国における衛生観念の形成（2）—」『言語文化論集』19-1、1997年。

ブリッグズ・A、村岡健次・河村貞枝訳『ヴィクトリア朝の人びと』（ミネルヴァ書房、1988年）

マーカムソン・ロバート・W、川島昭夫[他]訳『英国社会の民衆娯楽』（平凡社、1993年）

松井良明「失われた民衆娯楽：イギリスにおけるアニマル・スポーツの禁圧過程」  
有賀郁敏他[他]著『スポーツ 近代ヨーロッパの探求8』（ミネルヴァ書房、2002年）

松鷹彰弘、「イギリスにおけるツーリズムの発展と海浜リゾートの盛衰」『沖縄短大論叢』11-1、1997年。

松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次[他]編『女王陛下の時代（英国文化の世紀3）』（研究社出版、1996年）

道重一郎「第3章 イギリス中産層の形成と消費文化」関口尚志・梅津順一・道重一郎編  
『中産層文化と近代—ダニエル・デフォーの世界から—』（日本経済評論社、1999年）

村岡健次著、『ヴィクトリア時代の政治と社会』（ミネルヴァ書房、1980年）

村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史—宗教改革から現代まで—』（ミネルヴァ書房、1986年）

ライトソン・K、中野忠訳『イギリス社会史1580—1680』（リプロポート、1991年）

ラスレット・P、川北稔・指昭博・山本正訳『われら失いし世界—近代イギリス社会史—』（三嶺書房、1986年）

リーダー・W・J、小林司・山田博久訳『英国生活物語』（晶文社、1983年）

（欧文文献一覧）

Bailey, P., *Leisure and Class in Victorian England : Rational Recreation and the Contest for Control, 1830-1885* (Rutledge, 1978)

Cunningham, H., "Leisure and culture", F.M.L. Thompson ed., *The Cambridge Social History Of Britain 1750-1950; Volume 2: People and their environment* (Cambridge University Press, 1993)

De Grazia, Sebastian, "Of Time, Work, and Leisure", Michal R. Marrus ed., *The Emergence of Leisure* (Harper&Row, 1974)

Edmund M. Gilbert, *Brighton Old Ocean's Bauble* (Methuen, 1954)

Ingram, Martin, "Ridings, Rough Music and the 'Reform of Popular Culture' in Early Modern England", *Past and Present* 105, (1984), pp79-113.

J.A.R. Pimlott, *The Englishman's Holiday: A Social History* (Harvester Press, 1947)

Marrus, Michal R., "Introduction", Michal R. Marrus ed., *The Emergence of Leisure* (Harper&Row, 1974)

Marsden, Christopher., *The English At The Seaside* (Collins, 1947)

Plumb, J.H., "The Public, Literature, and the Arts in the Eighteenth Century", Michal R. Marrus ed., *The Emergence of Leisure* (Harper&Row, 1974)

Stokes, H.G., *The very first history of The English Seaside* (Sylvan Press, 1947)

Walton, John K., "The Demand for Working-Class Seaside Holidays in Victorian England", *Economic History Review*, 2<sup>nd</sup> ser., 34 (1981), pp249-65.

Walton, John K., *The English Seaside Resort: A Social History 1750-1914* (Leicester University Press, 1983)

Walton, John K., *The British seaside: Holidays and resorts in the twentieth century* (Manchester University Press, 2000)

Walton, John K., "British Tourism Between Industrialization and Globalization-An Overview", Hartmut Berghoff et al. eds., *The Making of Modern Tourism: The Cultural History of the British Experience, 1600-2000* (Palgrave, 2002)

Walton, John K and Poole, Robert., "The Lancashire Wakes in the Nineteenth Century", Robert D. Storch ed., *Popular Culture and Custom in Nineteenth-Century England* (St. Martin's Press, 1982)

Walvin, James., *Beside The Seaside: A Social History Of The Popular Seaside Holiday* (Allen Lane, 1978)

## Abstract

### The Class and Orientation in Leisure : Focus on The Modern England

This paper aims to explain three main issues which are as follows. First of all, this paper examines that how leisure was established in the history of England. Secondly, focusing on the class system in the modern English society, this paper discusses whether the class consciousness was fundamentally connected with orientation in leisure or not. Lastly, this thesis makes an attempt to analyze what kind of relationship each class had with pastimes.

In the days of agricultural society, the peasants' pace of life was very slow and their working rhythm was controlled by the weather. Sometimes they had spare-time off their work and enjoyed various kinds of traditional holidays and popular entertainments. All these pastimes are rooted in custom and habit, and people were partly obliged to participate in the feasts both the aristocracy and the people reconfirmed the solidarity of community. The reason they took part in traditional activities was to keep the community together. Therefore, the shared traditional activities seemed to enable communication between the nobles and plebeians.

In the modern society, the new work rhythm started over time, and it caused the England society to be in industrial capitalism. It was an enormous change for the working class who had been lived in the agricultural society. People were enabled to use "free time" independently instead of spare time. At this time, the middle class who assumed control of the society considered their values as universal. They tried to instill rational recreation into the working class, but, it was less successful than the middle class expected

In the late 19<sup>th</sup> century, commercial entertainments were brought in England, and the working class people preferred them to rational recreation. In the case of England, seaside resorts were developed on a large scale and were very popular beyond the social divides. That is obviously because here were multiple elements in the seaside resorts which served the needs of each class. As a result, the seaside resorts that were popularized by the commercial entertainment industry made remarkable progress in the modern England.

The development of the seaside resorts is considered to have contradicted the Victorian values which were based on moderation, and besides, it might be that the communication between the middle class and the working class was lost in the modern time.